

武蔵埼玉稲荷山古墳出土の埴輪 Ⅲ

若松良一

はじめに

前号に引き続き、埼玉稲荷山古墳から出土した形象埴輪のうち、未発表資料の残りを対象に、実測図を掲げ、観察記録と合わせて、逐一報告していく。家形埴輪・器財埴輪・人物埴輪・動物埴輪がある。これらのうち、後円部墳丘と同墳頂部から出土した資料は昭和43年8月1日から24日に行われた第1次調査、中堤及び内外堀から出土したものは昭和48年11月7日から翌年2月24日まで行われた第2・3次調査での出土品であるが、諸般の事情で昭和55年11月刊行の正式報告書に掲載できなかった資料である。平成14年度から継続的に行ってきた再整理によって接合が進んだものも少なくない。平成16年度には合計92点の実測図作成を行った。

なお、報告資料の個別番号は資料管理の便宜上、前号からの連続番号を用いることにしたい。

I 今回報告する形象埴輪の出土状況

1 前方部とこれに対応する中堤付近

今回報告する形象埴輪のほとんどが後円部墳丘または中堤造り出し付近から出土している。ほかの位置からの出土は極めてまれであるが、136の寄棟造り家の屋根破片は第1図に示したように、第26トレンチの前方部東側隅角に対応する中堤のコーナー部に接した内堀から出土している。前方部墳丘上または中堤上からの転落が推定される。

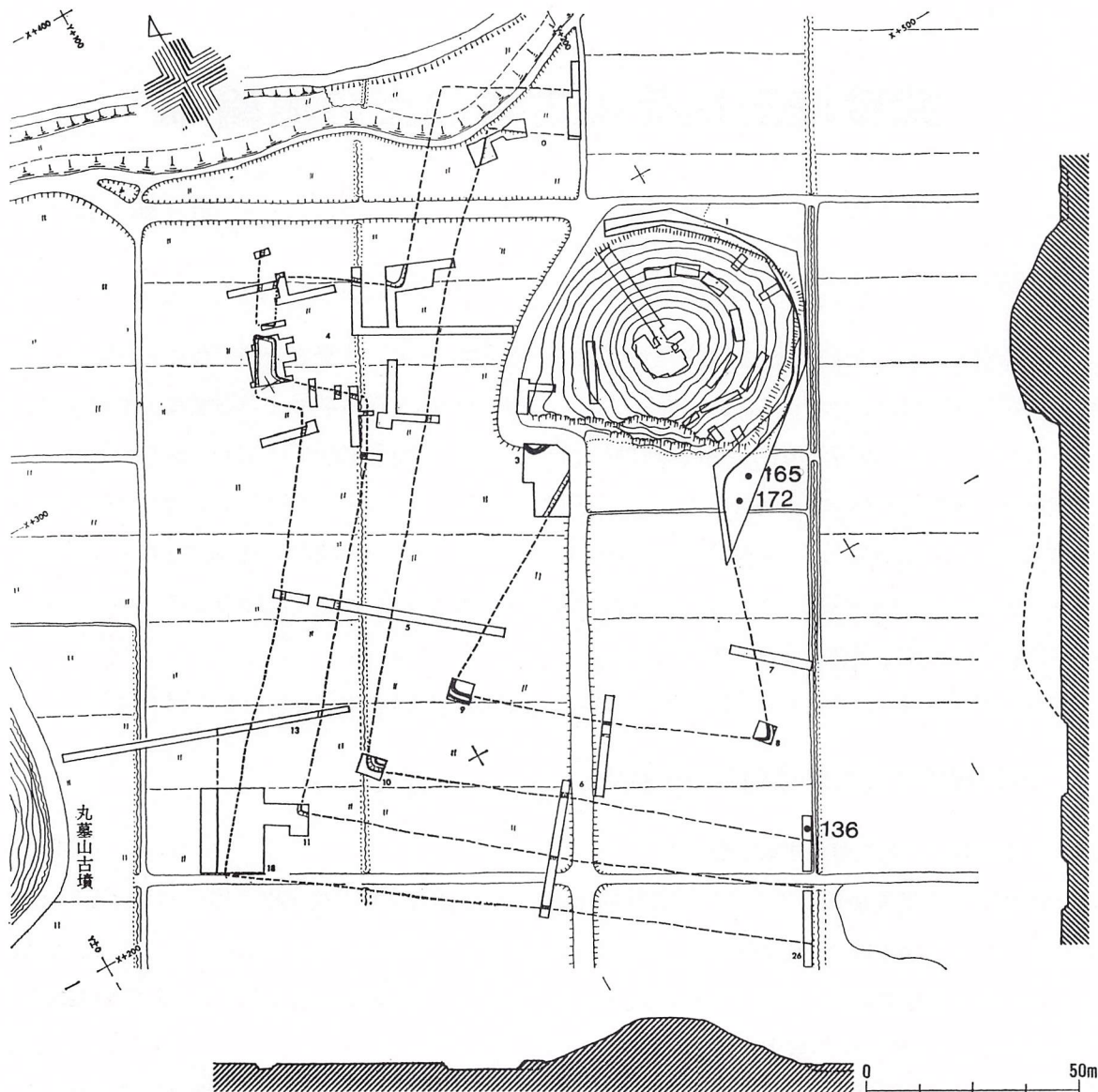
なお、遺物取り上げはトレンチ単位のため、第1・2図に示したドットは、おおよその出土位置を示したものであることを、誤解のないように付記しておく。

2 後円部墳丘

後円部墳丘では合計38点の形象埴輪片が今回の報告資料中にあり、このうち36点は墳頂部、2点は墳丘斜面部からの出土（第2図参照）である。まず、家形埴輪の出土状況について具体的に記す。

129の入母屋造り家上屋根破片は墳頂部中央に南北方向に設定した第5トレンチの北半部となる第1区表土と6T2区北拡張区（礫層北半部）から出土した破片が接合した。同一個体の上屋根下端部である132は6T1区（ほぼ中央部の空閑地に対応）と11T表土（後円部北東側墳丘斜面中段）から出土した破片が接合している（第2図参照）ので、家形埴輪は墳頂部に配置されていたが、破片となった後に、一部が墳丘斜面へと転落したとみられる。また、同一個体の破風板である130は5T1区から出土している。

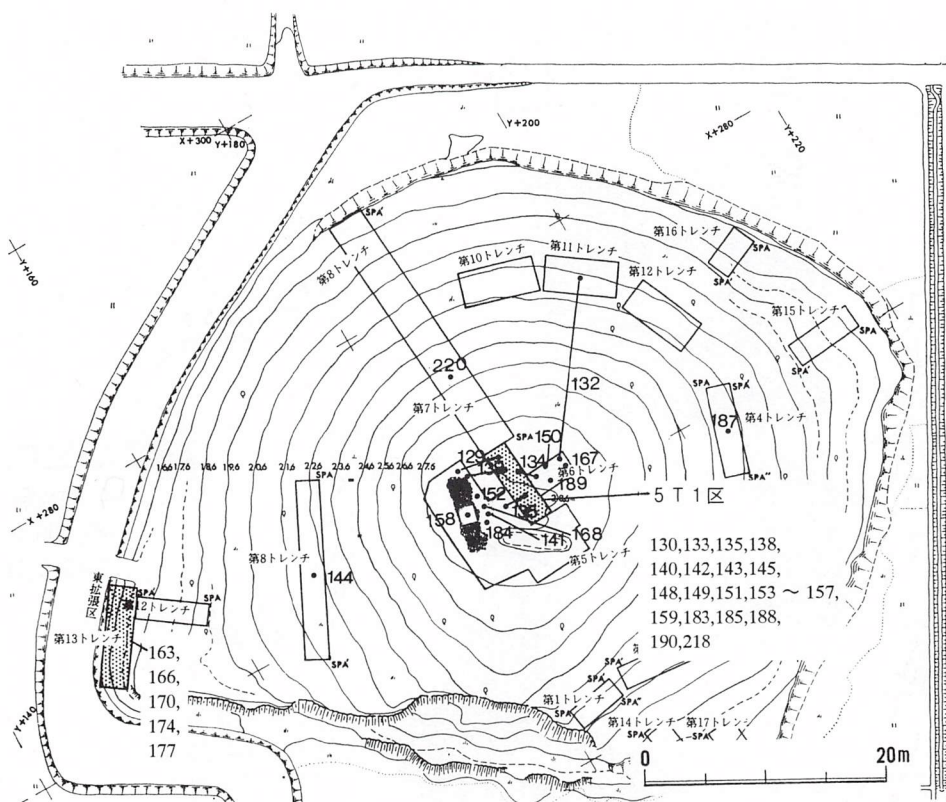
鱗の付く下屋根破片である133～135は5T1区の出土が中心で、6T1区北壁の1片が接合している。軒の破片である137・138・139はそれぞれ、6T2区北壁・5T1区・6T2区北拡張区+5T1区から出土している。円柱部と高床部である140～159は5T1区からの出土が13点、6T2区北拡張区から



第1図 稲荷山古墳形象埴輪出土位置図1 (全体)

の出土が2点、6 T 2区第1主体部出土が1点、6 T 1区北壁出土が1点、後円部北側墳丘斜面部の8 T出土が1点、無注記2点である。墳頂部の土層攪乱がひどかったことから、これらの破片からなる高床建物埴輪の原位置を輕輕に論ずることはできないが、圧倒的に第5トレンチ1区からの出土割合が高いことと最後まで原位置に留まる可能性の高い円柱基底部4点のうち3点が第5トレンチ1区からの出土であることを重視すると、その位置が後円墳頂部の中心部かわずかに北側の位置であった可能性は考えることができる。

さて、家形埴輪以外では、人物埴輪半身像の裾部180が6 T 1区から出土しているほか、双脚像人物の裾部である183と184が、それぞれ墳頂部の5 T 1区と6 T 2区から、また、同一個体の脚部である185も5 T 1区と6 T 2区出土破片が接合している。鳥形埴輪の同一個体片である188・189・190はそれぞれ、5 T 1区・6 T 1区・5 T 1区からの出土である。これと同一個体の可能性のある円筒台部167と168はそれぞれ、6 T 1区と6 T 2区から出土している。器種不明とした218は5 T 1区の出土で別の鳥形埴輪の胴と台を一連に製作したものである可能性がある。鶏形埴輪である187は後円部東側墳丘



第2図 稲荷山古墳形象埴輪出土位置図2 (墳丘部)

中段部の4Tからの出土であり、墳頂部からの転落と推定される。また、形象埴輪台部である220は後円部北側墳丘斜面中段に設けた7Tからの出土であり、これまた墳頂部からの転落品であろう。

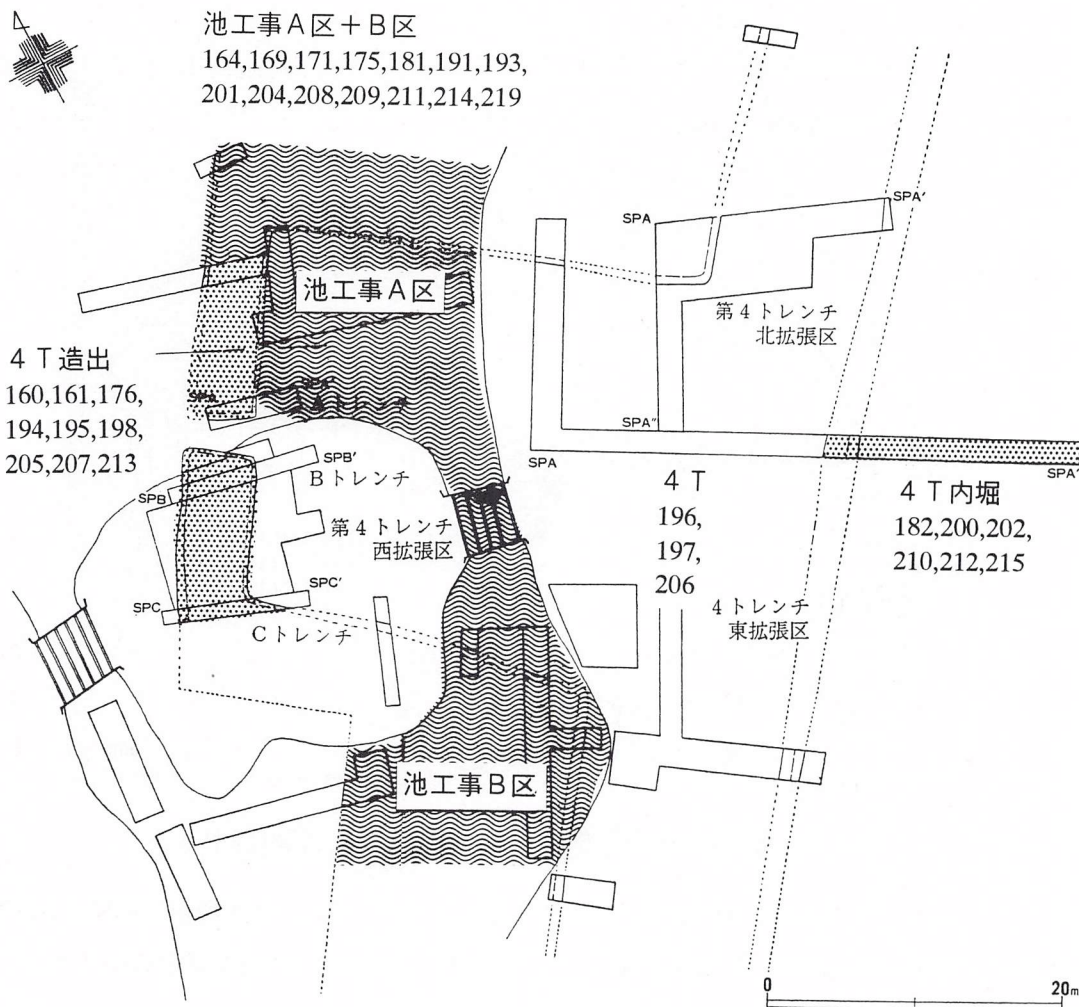
3 後円部墳裾付近の内堀

後円部西側に付設された造り出しの北側に接する位置に設定された13Tからは5点の形象埴輪片が出土している(第2図参照)。蓋の軸部と推定される163、器種不明の板状破片166・170、人物の垂髪174、人物の佩刀177である。これらは後円墳頂部から転落した可能性と造り出しから転落した可能性の2者を考える。ただし、造り出し上に形象埴輪の配置があったか否かは現在の時点では未確認である。

いっぽう、13Tとは墳丘を挟んだ反対側に当たる第3次調査の2Tは東側のくびれ部から内堀に亘る調査区であり、ここからも2点の形象埴輪片が出土している(第1図参照)。壺形埴輪と推定される165と人物埴輪頭部172であり、両者とも後円墳頂部から転落した可能性が高い。

4 中堤造り出し付近

西側の中堤に付設された造り出し付近からはまとまった量の形象埴輪が出土している(第3図参照)。4T造り出しと注記があるのは中堤造り出しに接する西側外堀からの出土で、盾持ち人埴輪の160と161、人物埴輪耳の176、動物埴輪胴部の194と195、猪形埴輪後脚部付根の198、馬形埴輪脚部の205、動物埴輪脚部の207、猪形埴輪足の213がある。また中堤造り出し東側に接する内堀に相当する4T内堀からは帯を締めた人物腰部である182、動物埴輪前脚部付根の200、馬形埴輪鞍部の202、猪形埴輪足の210・212・215が出土している。4Tの注記があり、中堤造り出し上の北東部と考えられる位置からは猪形埴輪尻尾部の196・197と馬形埴輪頭部の206が出土している。池と注記があるのは発掘調査に少し先行して行われた池の掘削工事中に出土したもので、中堤造り出し北西部とこれに接する外堀部(池



第3図 稲荷山古墳形象埴輪出土位置図3（中堤造出し）

工事A区) または中堤造り出し南側に接する外堀部(池工事B区) から出土したものである。該当するのは甲冑形頸部の164、形象台部の169、人物冠帽と推定される171、女子前額部の175、人物半身像腰部の181、鹿形埴輪の頸部である191と同一個体の胴部である193、動物埴輪胸部の201、馬形埴輪尻繫の杏葉である204、動物埴輪脚部の208・209、犬形埴輪尻尾と推定される211、猪形埴輪足の214、鳥形埴輪頸部の可能性がある219である。

池出土品は原位置を特定しがたいが、4 Tとこれに接する4 T内堀の出土資料から中堤上の北東部分には馬・猪・人物が配置された可能性は高いであろう。また、中堤造り出し上の前縁部付近(西側部分)には盾もしくは盾持ち人、人物、猪、馬などが配置されていた可能性があろう。

II 形象埴輪の特徴

1 家形埴輪の特徴

○入母屋造り高床式家

■上屋根・破風板・千木

129は入母屋造り家形埴輪の上屋根部破片である。6 T 2区北拡張区の2片と5 T 1区表土の1片が接合した。緩やかな丸みを持って立ち上がり、大棟へと向かう。平側の立面形は上広がり逆台形

である。破風板部は欠失しているが、妻側が吹き抜けになっており、下端部だけが連結している。厚手の造りで、器肉は2.0～2.8 cmを測る。粘土紐積み上げ成形を行い、外面調整はヨコハケ（8本／1.5 cm）後、軽く横位のユビナデを加えている。内面調整は主に斜位のユビナデで、妻側のみ縦位のハケ調整を加えている。また、外面には線刻で縦方向の連続菱形文を施文しており、3単位が確認できる。妻よりの部位にはさらに斜線が付加されている。一般には斜格子文を施す場合が多いが、連続菱形文とする点は注目される。屋根の鉦葺を表現したものであろうか。部分的に赤彩が残っており、菱形の中が赤く塗りつぶされていた可能性がある。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。『埼玉稲荷山古墳』報告書では第59図11に拓影図が掲載され、盾形埴輪として解説されていたが、今回の再整理で復原が進んだことによって家形埴輪の屋根と判明したので訂正しておく。

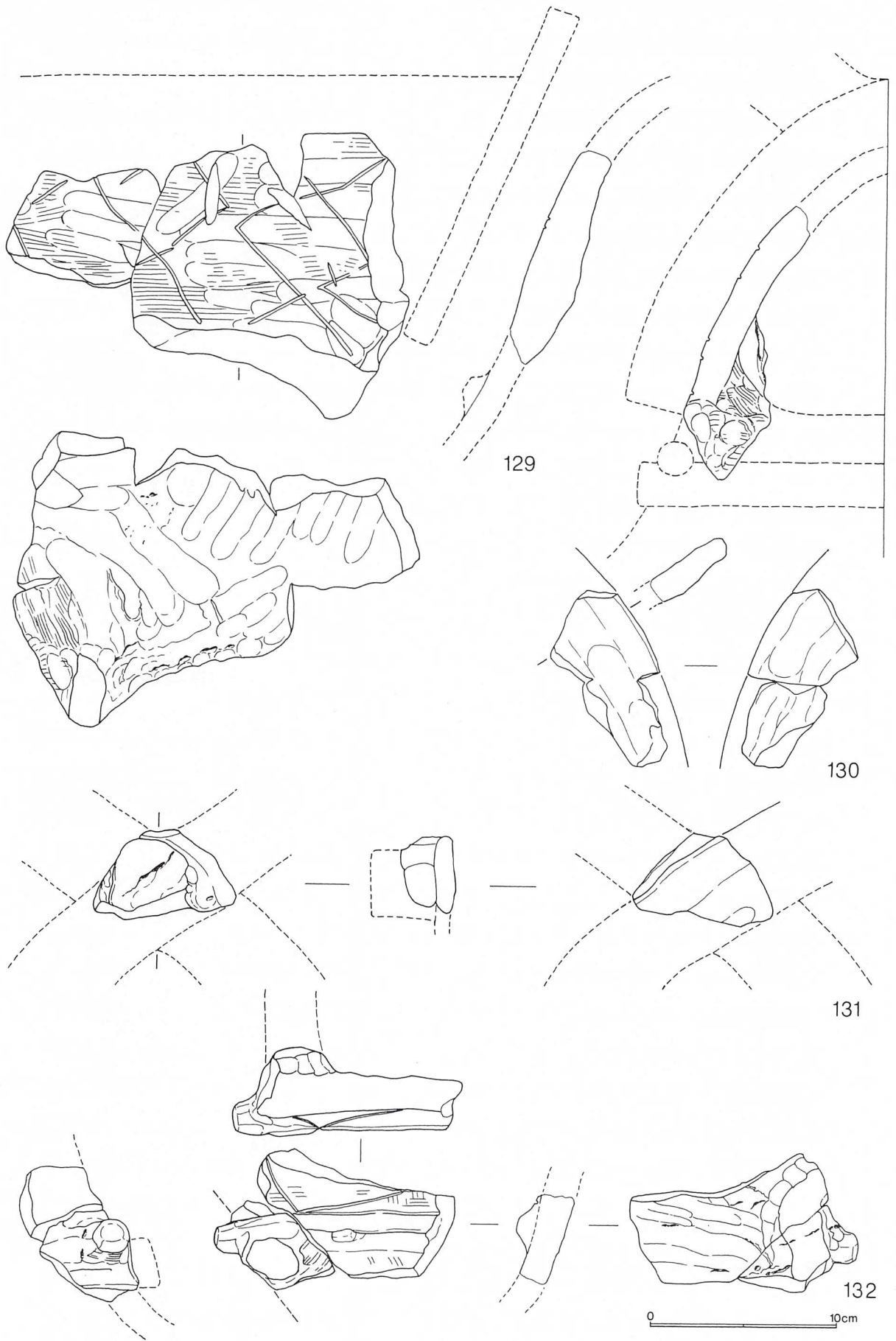
130は129と同一個体の破風板である。5 T 1区2層と5 T 1区表土の2片が接合した。外縁部が内湾しており、屋根の断面形と対応関係にあるものと見られる。現存幅は4.0 cmであるが、屋根との接合面が確認できないので、さらに2 cm程度は幅が広いものと推定される。粘土紐を合せて板状に作っており、内外面とも長手方向のユビナデ調整を施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は肌色に近い淡褐色を呈する。

131は129と同一個体の破風板交差部で延長部が上方へ続くことから、干木を形成していたと見られる。6 T北壁の注記がある。段のある立体交差であり、交差部の外面には直径4 cmの円筒形の突起を貼り付けて、飾り楔を表現する。内外面の調整は丁寧なナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

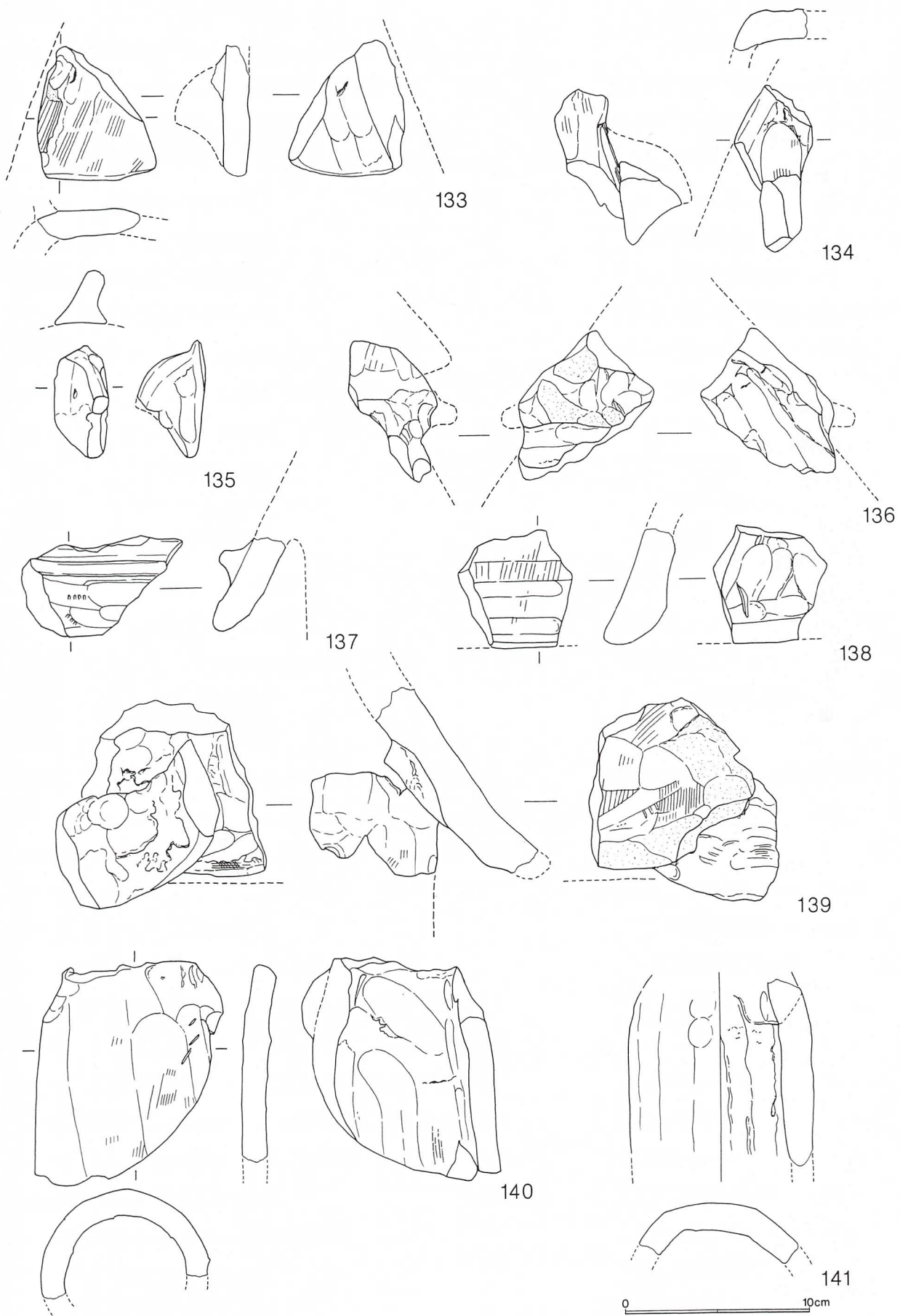
132は129と同一個体の上屋根下端隅角部分で、6 T 1区と1 1 T表土が接合した。平側に断面形状の凸帯を水平に貼りつけて、屋根材を押さえるための上屋根下端部の押縁を表現している。この押縁は妻側に伸びて突出している。また、妻側には、この押縁と直交して下支えする横木が表現されているが、これは妻側の下屋根下端部の屋根材を押さえる押し縁を兼ねているものかもしれない。内面に反対側の屋根と連結する部材の付根があり、それが上に伸びずに、下端部に限られているため、129と同様に、妻は煙出しの孔が吹き抜けになっているとみられる。成形については、隅角が直角に作られているものの、板作りではなく、粘土紐巻き上げである。外面調整はタテハケとヨコハケで調整した後、ナデを加えている。内面調整は横位のユビナデである。平側押縁より上の屋根部分には線刻で文様が描かれ、赤彩が施されている。129と同様に、連続菱形文が施文され、赤彩で充填されていたとみて誤りないであろう。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

■下屋根・鰭飾り

133は鰭飾りを伴う屋根の下がり棟部で、5 T 1区表土の注記がある。屋根の傾斜が不明のため、平置き実測している。下がり棟に鰭飾りの脱落痕があり、付根部分がわずかに残存している。成形は粘土紐巻き上げによっており、コーナーも丸みを帯びている。外面調整はナナメハケ（7本／1.0 cm）、



第4图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図1



第5图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図2

内面調整は斜位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。129と胎土、焼成が共通しているため、同一個体の可能性があり、その場合、連続菱形文を伴わないことと下がり棟が下広がりになることを根拠に、下屋根を形成していたと考えることができる。

134は133と同一個体の下屋根下がり棟部で、鱗飾りを伴っている。6 T 1区北壁と5 T 1区が接合した。コーナーに丸みがあり、内面に水平方向の接合痕を残すので、粘土紐巻き上げ成形とみられる。鱗は別体成形したものを貼り付けており、内湾する切れ込みを下側にもっている。外面調整はタテハケ後に縦位のユビナデを加えている。内面調整は横位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

135は下がり棟部から脱落した鱗飾りである。5 T 1区2層の注記がある。133・134と同一個体である。板状で、側面形は三角形に近く、上側の斜辺が外湾し、下側の斜辺が内湾するので、まさに魚類の背鱗状と言ってよい。内外面ともユビナデ調整されており、端部は丸く仕上げられている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

138は屋根の軒部で、5 T 1区表土の注記がある。器肉が2.5 cmある部厚い作りで、わずかに外反気味である。外面調整はタテハケ（5本/1.3 cm）の後に横位ナデを加える。内面調整は斜位の強いユビナデ、端部はヨコナデである。胎土は粗砂を少量含み、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石、チャート、角閃石が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

■ 円柱・高床部

139は円柱の取り付く屋根の軒部である。6 T 2区北拡張区と5 T 1区表土および表採の合計3片が接合した。軒部は器肉が2.5 cmある部厚い作りで、わずかに外反する点など138と全く一致している。内側には復原直径10 cmの円柱の端部がユビオサエによってしっかりと固定されている。円柱部は粘土紐巻き上げ成形、屋根及び円柱の外面調整はタテハケ（7本/1.3 cmと11本/1.3 cmの2種）の後にナデを加えている。内面調整は雑なナデを施す。軒の端部はヨコハケの後にナデを加えている。胎土は細礫から細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒、角閃石、長石が観察される。焼成は屋根が堅緻で、円柱が軟質であり、焼けむらが顕著である。色調は屋根の外面が淡赤褐色、円柱の内面が淡褐色を呈する。

140は円柱部で、5 T 1区2層の注記がある。直径は9.4 cmあり、50%の残存である。円柱の上端は未調整の端部となっており、片側の外面に屋根に固定するための補強用粘土が貼り足されている。このため、円柱の端部全体が屋根に密着するのではなく、外側で屋根を受け、内側は浮いていたものと推測される。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（9本/1.7 cm）の後に縦位のナデを加えて、ほぼ完全に擦り消している。内面調整は主に縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒、石英片岩、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

141は円柱部で、6 T 2区北拡の注記がある。30%の残存破片から反転復原実測を行った。復原直径は10 cmである。円柱の上端はすぼまるので屋根との接合部に近いと推測される。粘土紐を巻き上

げて、絞り気味に成形しているので、多角形状の横断面をなしている。外面調整は縦位のナデ（ハケメを完全に擦り消した可能性もある）、内面調整は縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂を少量含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

142は高床部で、5 T 1区2層、5 T 1区表土、第3次内堀3 T（西側くびれ部に設定）の3片が接合した。厚さは平均で2.2 c mあり、幅は22.5 c m、長さ20.4 c mを測り、ほぼ平坦である。下面に円弧状に巡るユビナデ痕があることから、円柱が接合された位置が推定可能である。上面には直径9.8 c mの円形の剥離痕とこれに接する舌状の剥離痕とがあり、周囲がユビナデ調整されている。位置関係から見て、円柱の剥離痕ではなく、円座と付属品が剥離した痕跡と推測される。成形は粘土紐を束ねて板状に製作しており、上面はハケ調整（6本/0.9 c m）後にナデを加えている。内面調整は雑なユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

147は高床部で、無注記だが、142と同一個体である。厚さは平均で2.4 c mあり、ほぼ平坦である。通し柱の接合面が残っており、この部分では、他より厚く、3.4 c mある。成形は粘土紐を束ねて板状に製作しており、上面は円弧状のユビナデ、下面はユビオサエと雑なユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

143は円柱の取り付く高床部で、5 T 1区表土の3片が接合した。床板の厚さは2.9 c mあり、円柱との接合部では上下両面に補強用の粘土を貼り足している。円柱は床の上に突き抜ける通し柱で、復原直径は10.5 c mある。円柱部の成形は粘土紐巻き上げであり、円柱を繋ぐように粘土をはめ込んで床板を作っている。円柱部の外面調整はタテハケ（5本/1.0 c m）後に縦位のナデを加えている。内面調整は縦位のユビナデを施す。床板はユビナデ調整を施すが、上面が丁寧で、下面は粗雑である。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、チャート、角閃石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成はやや軟質で、粉っぽい。色調は淡褐色を呈する。

144は円柱の取り付く高床部で、8 T 表土の注記がある。床板の厚さは最も厚いところで2.6 c mある。この床は縁の部分であり、外側に傾斜しており、端部も斜めに整形されている。円柱は通し柱であり、成形は粘土紐巻き上げ、床板の剥離面ではタテハケ（6本/1.6 c m）調整を施す。内面調整は斜位のユビナデを施す。床板はユビナデ調整を施すが、上面が丁寧で、下面は粗雑である。胎土は粗砂を少量含み、酸化鉄粒、凝灰岩粒、チャート、石英が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

148は高床端部で、5 T 1区2層の注記がある。床板の厚さは最も厚いところで2.4 c mある。平置き実測したが、同一個体の144を参考にすると外側に傾斜するものであろう。端部は斜めに整形されている。成形は粘土紐を合せて板状としたことがわかる。上面はハケ（7本/0.7 c m）調整後に、横位ナデを施す。下面は雑な横位ユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、花崗岩礫、石英、長石、チャート、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

145は円柱部で、5 T 1区表土と6 T 北壁が接合した。残存率30%の破片から反転復原実測した。

復原直径は9.2 cmで、上すぼまりの器形をもつ。円柱の上端は肥厚するので、屋根と接合する部位になるものと推測される。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（9本/1.4 cm）で、上部にのみ横位のユビナデがある。内面調整は斜位のユビナデを施す。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通だが、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

149は円柱の取り付く高床部で、5 T 1 区 2 層の注記がある。床板の厚さは2.3 cmであるが、円柱との接合部では接着面積を増やすために厚くなっている。円柱は通し柱であり、成形は粘土紐巻き上げ、内面調整は斜位のユビナデを施す。床板は上面がタテハケ（10本/1.8 cm）調整、下面は横位のユビナデを施す。胎土は粗砂を少量含み、長石、石英、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

150は中空製作の角形品で、6 T 1 区北壁の注記がある。木芯に粘土を巻き付けて成形し、長手方向のユビナデ調整を施す。直立せずに、一方向に湾曲する形状を示す。根元の部分が欠けており、直接は接合しないが、142の舌状の剥離痕から脱落した可能性が高い。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。高床式家形埴輪の床に置かれた付属品であるが、現在のところ、何を形象したものかは不明である。

151は高床の取り付く円柱部で、5 T 1 区表土の注記がある。円柱の復原直径は12.0 cmである。床板は接合面から剥離している。床板の下に接して、縦方向に板状の部品が貼りつけられていて、その付根が残存している。これは床を支えるための根太とみられ、根太が柱を臍穴で貫いていたことを示す表現といえよう。円柱の成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はナナメハケ（9本/1.4 cm）で、内面調整は縦位のユビナデを施す。床板及び根太はユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成はやや軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

153は円柱部で、5 T 1 区表土と5 T 1 区 2 層が接合した。25%の残存破片から反転復原実測を行った。復原直径は9.2 cmである。成形は粘土紐を巻き上げて行い、内面調整後に切開技法を用いて、直径を小さくする際に絞気味に成形しているので内面が角張る。外面調整はタテハケ（7本/1.0 cm）後に縦位のナデを加える。内面調整は縦位のユビナデを施す。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、長石、輝石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

158は円柱の基底部で、6 T 2 区第1主体の注記がある。残存率25%の破片から反転復原実測を行った。復原底径は12.4 cmで、わずかに下広がり器形をもつ。成形は明瞭な接合痕が確認できないものの、基部を作った後に、粘土紐を巻き上げているようである。また、切開技法を用いており、切開面の接合部内面には粘土を貼り足して、ユビオサエを行っている。外面調整はタテハケ（13本/1.7 cm）主体で、一部ヨコハケも施されている。内面調整は縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂を少量含み、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は全体としては普通だが、内面硬質で外面軟質にして粉っぽいという状態で、焼けむらがある。色調は外面が淡黄褐色、内面が淡灰褐色を呈する。

高床式家1としたものの中には、円柱部のハケメを擦り消すものと擦り消さないものがあり、細分することも可能であるが、これを別個体と認定することも現状では困難なため、一括して扱うことにした。いちおう、基底部付近と上端の内側ではハケメの摺り消しを省略する場合があったと捉えておく。

○高床式家2

137は押縁を表現する屋根の軒部で、6 T 2区北拡表土の注記がある。器肉の厚さは1.7 cmある。軒から少し上がった位置に、断面台形状で高い凸帯を水平に貼りつけて、押縁を表現する。外面調整は粗い櫛状工具によるタテハケ（4本/0.9 cm）の後に横位ナデを加えている。内面調整はナメハケの後に斜位のナデを加える。凸帯は丁寧なヨコナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は外面が淡赤褐色、内面が淡黄褐色を呈する。

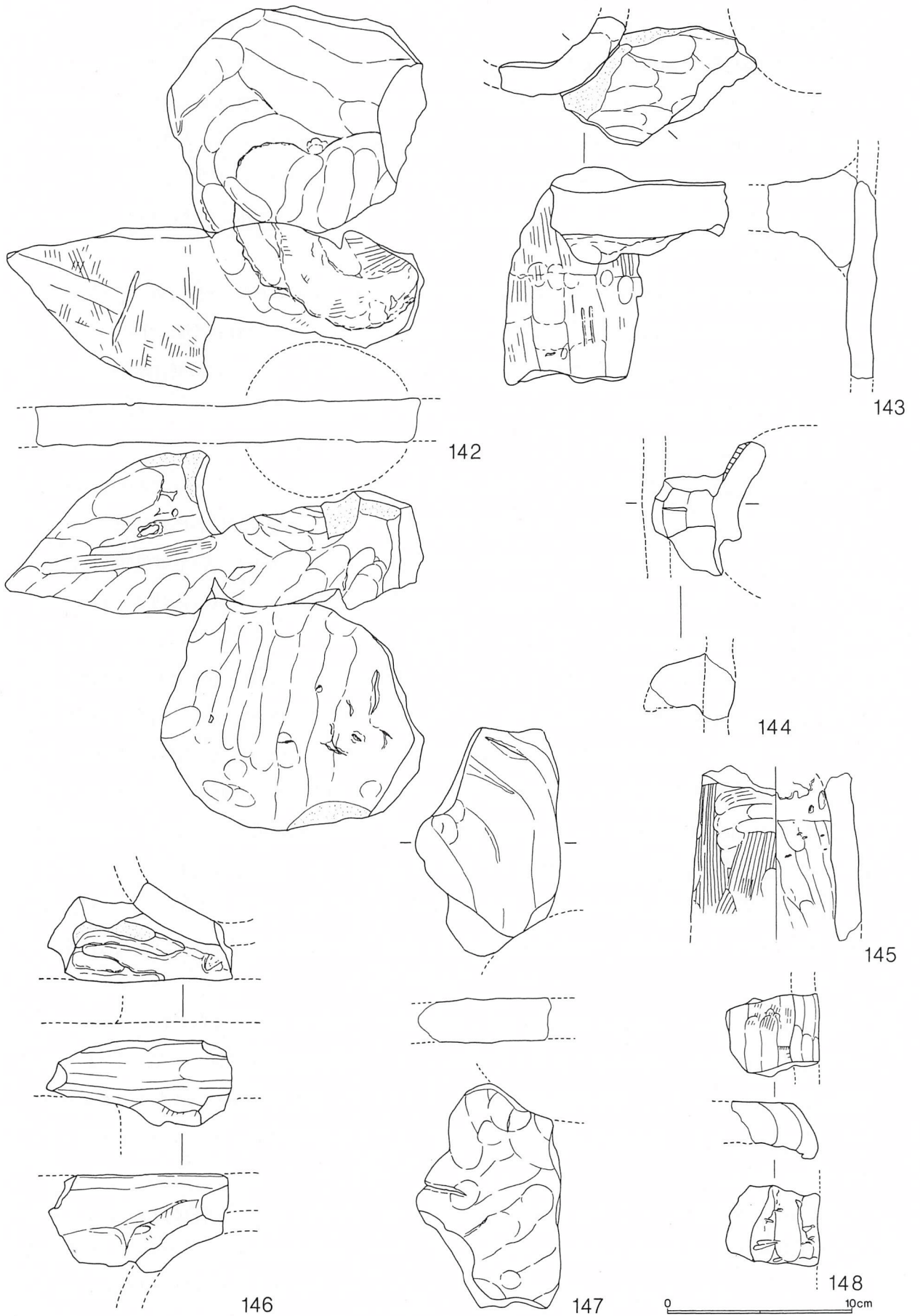
152は高床の取り付く円柱部で、6 T北拡表土の注記がある。残存率25%の破片から反転復原実測した。床板は接合面から剥離している。円柱の成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は粗いタテハケ（3本/1.0 cm）後に、縦位のナデを加えて、ほぼ完全に擦り消している。内面調整は縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂を少量含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、著しく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

154は円柱部で、5 T 1区2層と5 T 1区表土が接合した。残存率30%の破片から反転復原実測を行った。復原直径は10.2 cmである。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は砂粒の移動が認められることから、縦位ヘラケズリと推定した。内面調整は強い縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、輝石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調はくすんだ淡褐色を呈する。

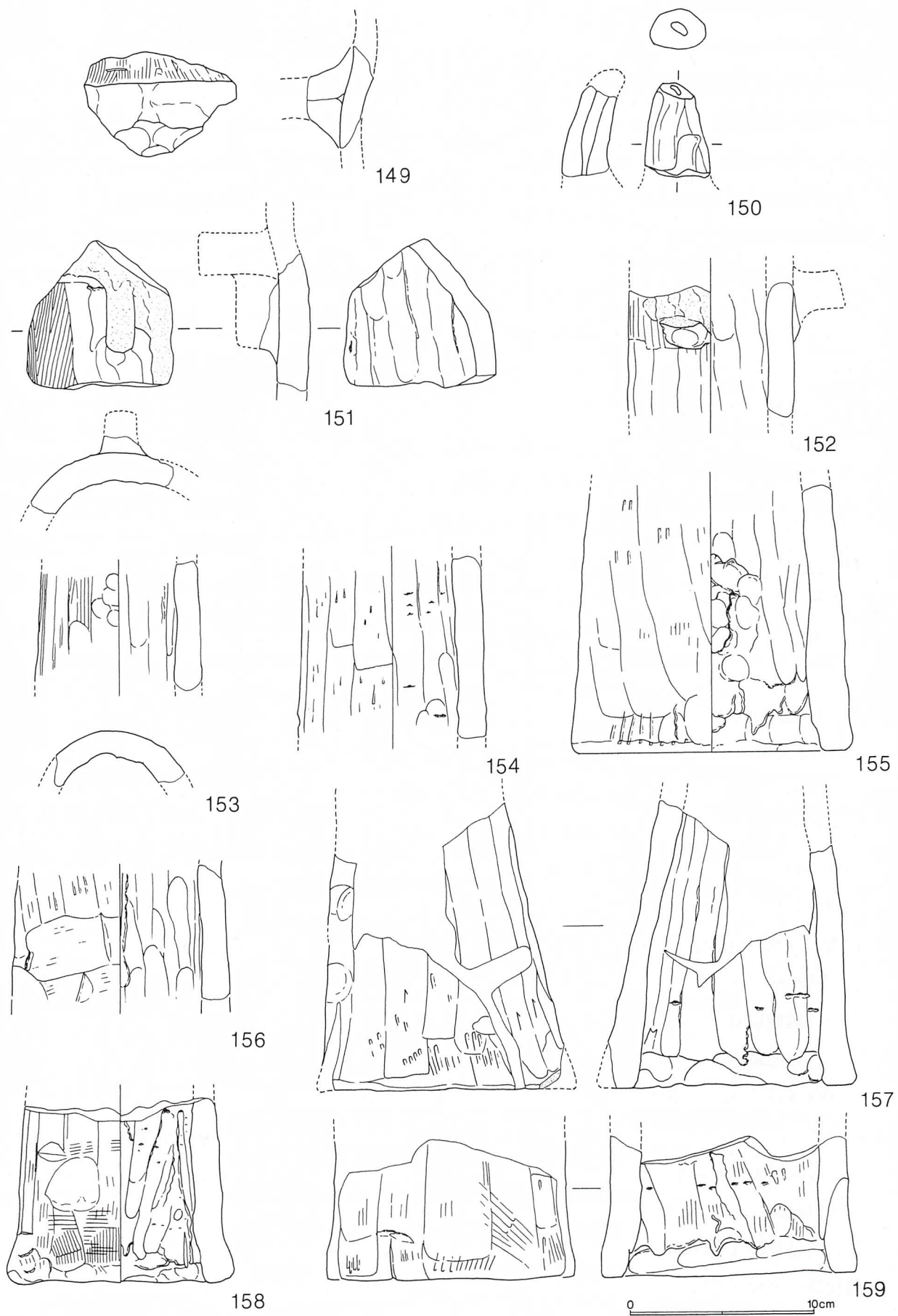
155は円柱の基底部で、5 T 1区表土の注記がある。残存率25%の破片から反転復原実測を行った。復原底径は15.4 cmで、下広がり器形をもつ。成形は粘土紐巻き上げ後、ヘラで垂直に2箇所を切開し、一部を取除いてから直径を小さくして切開面同志を接合する「切開技法」を用いている。手の入る太さの内に内面調整を行って、後で細くする手法である。外面調整は粗いタテハケ（7本/1.7 cm）の後に縦位のナデを加えている。原体は通常の木口でなく、櫛の可能性もある。内面調整は縦位のユビナデを施し、切開面接合時に雑なユビオサエを加えている。底面は平坦で、作業台の木目圧痕が付いている。自重によるものである。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英片岩礫、角閃石が観察される。焼成はやや軟質で、粉っぽい。色調は淡褐色を呈する。

156は円柱部で、5 T 1区表土の注記がある。残存率20%の破片から反転復原実測を行った。復原直径は12.0 cmである。成形は粘土紐巻き上げ後に、155と同様な切開技法が用いられている。外面調整は主に縦位ヘラケズリ、内面調整は縦位のユビナデを施す。胎土は小礫と粗砂をやや多く含み、石英、チャート、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で、粉っぽい。色調はくすんだ淡褐色を呈する。

157は円柱の基底部で、5 T 1区2層の注記がある。残存率50%である。底径は14.2 cmで、下広がり器形をもつ。成形は粘土紐巻き上げ後に、155と同様な切開技法が用いられている。外面調整は粗いタテハケ（6本/2.0 cm）の後に縦位のヘラケズリを加えている。内面調整は基底部のみ横位ユビナデで他は縦位のユビナデを施す。胎土は細砂を少量含み、凝灰岩粒、石英、長石、チャート、角閃石が観察される。また、凝灰岩の崩壊したブロックをマーブル状に含む。焼成は軟質で、粉っぽ



第6図 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図3



第7图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図4

い。色調は淡黄褐色を呈する。

159は円柱の基底部で、5 T 1 区表土の注記がある。残存率40%の破片を反転復原実測した。復原底径は13.6 c mで、わずかに下広がり器形をもつ。幅5 c mの板状粘土で基部を製作してから、粘土紐巻き上げ成形し、155と同様な切開技法を用いている。外面調整は粗いタテハケ（5本/1.2 c m）の後に縦位のナデを加えている。内面調整はタテハケ後に斜位のユビナデを施す。底面は平坦で、スノコ痕はない。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。また、凝灰岩の崩壊したブロックをマーブル状に含む。焼成は軟質で、粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

152・154～157と159の円柱部は同一個体と見られ、成形、調整手法が特殊である。さらに、137屋根部に用いられた粗い櫛状の調整具との共通性から、これらは同一個体の可能性が高いと判断し、高床式家2とした。

○高床式家3

146は円柱の取り付く高床部で、注記はない。床板は上面が剥離していながら、現存で3.5 c mの厚さがある。この床は縁の部分であるが、ほぼ平坦で、端部も四角く収められている。円柱は通し柱であり、成形は粘土紐巻き上げ、外面にはタテハケ調整を施す。床板は剥離面に粘土紐の形状が明瞭に残っており、円柱を繋ぐように粘土紐を充填して、床を形成していることが窺われる。床板の側面と下面は丁寧なナデ調整を施す。胎土は細礫から粗砂をやや多く含み、チャート円礫、石英、長石、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は良好で堅緻。色調は内外面赤褐色、器肉暗茶褐色を呈する。焼成と色調の点で入母屋造り高床式家及び高床式家2とは完全に別個体である。

○寄棟造り家

136は寄棟造り家の屋根、下がり棟部である。内堀2 6 Tの注記がある。表面の剥離がひどいが、平側に押縁らしき表現があり、妻側に伸びて突出している。妻側にもこれと交差して上に乗る横木の表現があり、押縁となるものであろう。妻上部外縁部は外に張り出すようすなので、妻隠し板となる可能性がある。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は横位ナデ、内面調整は斜位ユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通だが、粉っぽい。色調は外面が橙褐色、内面が淡黄褐色を呈する。出土位置から、前方部墳頂部か東側の中堤コーナー部に置かれていた可能性が考えられる。

2 器財埴輪の特徴

○盾形埴輪

162は盾形埴輪の鱗部である。池の注記がある。円筒部の側面前よりの位置に貼りつけられていたもので、向かって右上の隅角部である。円筒からの張り出しが小さいので、小規模な盾となり、盾持ち人となる可能性もある。盾面には側辺に沿ってへら描きによる2本の平行沈線を引き、その内側に接して斜線を引いている。成形は縦長の粘土紐を2本合せて板状に作っている。外面調整は斜位ユビナデ、内面調整は強い縦位ユビナデである。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが、粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

○衣蓋形埴輪

163は上部が細い円筒形、下部が裾広がり器形をとることから衣蓋形埴輪笠部の上部に付く軸受

け部と推定した。第3次内堀13Tの注記がある。25%の破片からの反転復原実測で、円筒部の復原径は10.0cmを測る。上端部にはヘラケズリによる抉り痕がある。また下部には断面M字状の凸帯が巡る。鹿角状の立ち飾りの付く円筒形の軸部を受けるソケット部となろう。成形は粘土紐巻き上げで、凸帯の上には乾燥単位となる軸部の接合痕が明瞭に残る。外面調整はタテハケ（7本/1.4cm）、内面調整は横位ヨコナデである。胎土には粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好にして堅緻で、明赤褐色を呈する。

○甲冑形埴輪

164は人物埴輪の頸部としては長すぎることから、前号で報告した52を参考にして、甲冑形埴輪の頸部と推定した。池の注記がある。30%の破片からの復原実測で、下部での復原径は7.8cmである。上部には補強用と推定される低平な凸帯が巡る。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（12本/2.0cm）の後に横位ユビナデを加える。内面調整は下位では斜位ユビナデ、上位ではヨコハケ（7本/1.3cm）である。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート（特に多い）、石英、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通、色調はくすんだ淡赤褐色を呈する。

○壺形埴輪

165は壺形埴輪の底部である。第3次内堀2Tの注記がある。強く湾曲して立ち上がる。残存率10%の破片からの復原直径は34cmである。底径が大きく、張り出しが小さいので平底風の外観となる。底面にはスノコ状圧痕がある。成形は粘土紐巻き上げで、基部は作っていないらしい。外面調整はタテハケ（7本/1.7cm）、内面調整は横位のユビナデを施す。胎土には粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、片岩が観察される。焼成は良好で、外面は還元がかっている。色調は外面が灰色、内面がくすんだ黄褐色を呈する。また、底面付近は黒色を呈しており、窯に浅い窪みを掘って据えた可能性が考えられる。

○不明器財埴輪

166は長方形の板状断片で、わずかに上方へ向かって幅を減じる。裏面に明瞭な剥離痕はないが、家形か器財形埴輪に貼り付けられていた部品と推測される。板状に成形し、上面調整は粗いタテハケ（13本/4.0cm）を1回で施す。下端部にはユビナデを加える。下面調整はタテハケ（5本/1.5cm）の後にユビオサエを加える。胎土には粗砂を少量含み、チャート、石英、長石が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

170は長方形の板状断片で、左右に伸びるとともに、上方が破断面となっている。現存部に本体への接合痕はないので、馬形埴輪の障泥、盾形埴輪の外縁部（この場合、縦方向となる）、家形埴輪の扉などが候補となる。粘土紐を接続して板状に成形し、長手方向のハケ（5本/1.2cm）調整を施す。胎土には粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒、チャート、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通、色調は淡赤褐色を呈する。

○形象埴輪台部1

167と168は同一個体の形象埴輪台部である。167は6T1区北壁と5T1区表土が接合し、168は6T2区の注記がある。167は残存率40%、168は20%で、ともに反転復原実測を行った。167の復原直径は12.8cm、168は11.6cmである。細身かつ薄手の円筒であり、調整が丁寧である。ともに断面

三角形の凸帯が巡る。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（12本／1.9cm）、内面調整は縦位のユビナデを施す。凸帯は布目を伴う丁寧なヨコナデである。167の外面にササラ状工具の当たった痕があるが、形象部の彩色時に誤って付いたものであろう。胎土は細砂を僅かに含む精選土であり、チャート、長石、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好だが少し粉っぽい。色調は淡褐色を呈する。なお、同一個体片が他に9点あり、5 T 1区2層、5 T 1区表土、6 T 1区北壁、6 T 2区、6 T 2区北拡、1 2 Tの注記がある。

○形象埴輪台部 2

169は形象埴輪台部である。池の注記がある。残存率40%の破片から反転復原実測を行った。復原直径は16.0 cmである。小型の円筒であり、人物か器財の台部となろう。断面台形の凸帯が巡り、下の段にはヘラ切り放しの円形透孔がある。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は上段ではタテハケ（8本／1.4cm）、下段ではナナメハケを施す。内面調整は縦位のユビナデである。胎土は細砂をやや多く含み、チャート、長石、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好だが少し粉っぽい。色調はくすんだ赤褐色を呈する。

○形象埴輪台部 3

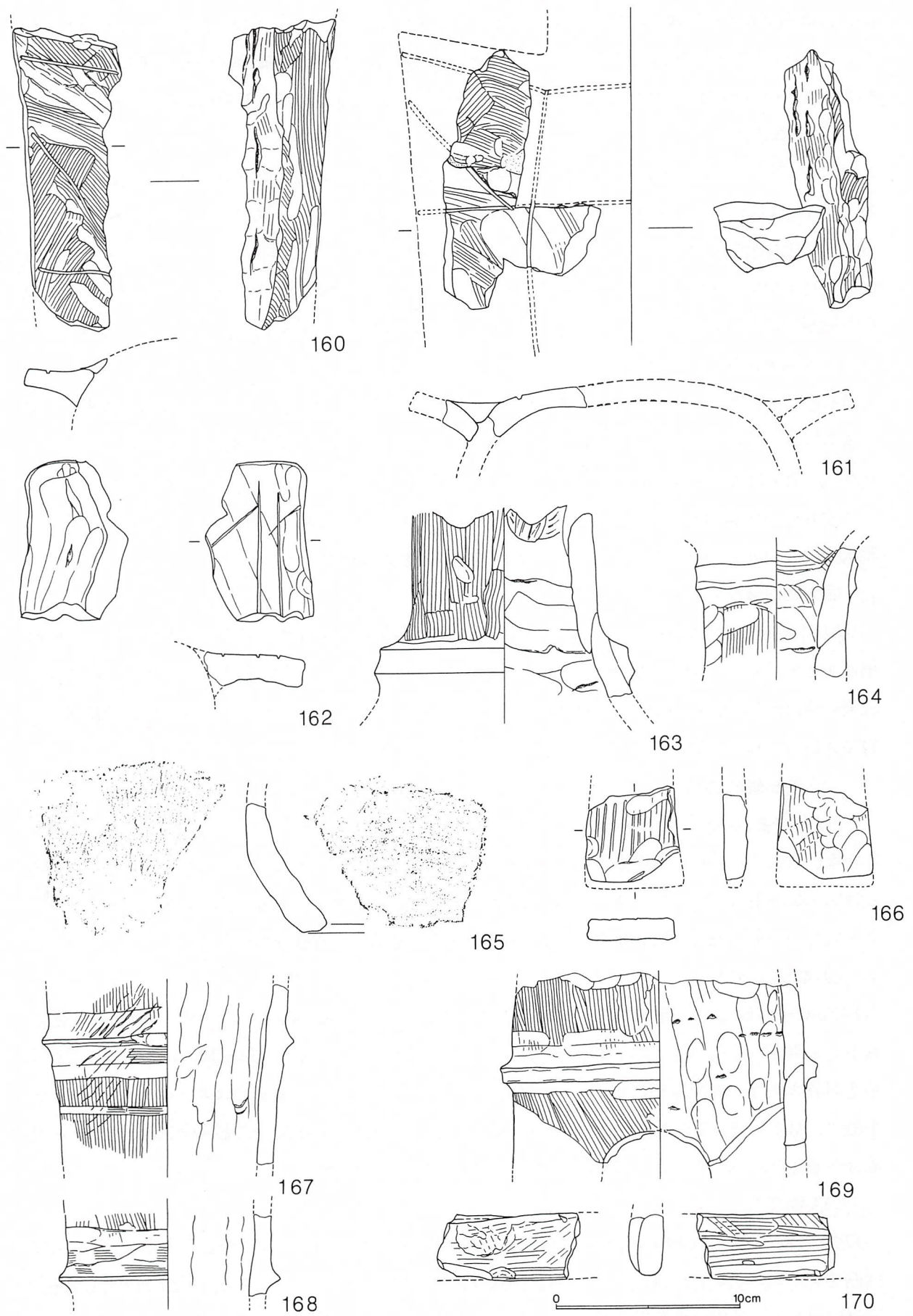
220は形象埴輪台部である。7 T 表土の注記がある。残存率15%の破片から反転復原実測を行った。復原底径は19.6 cmである。小型の円筒であり、人物か器財の台部となろう。厚手の製作であり、基部技法を用いずに、底部から粘土紐を巻き上げている。外面調整は粗いタテハケ（9本／3.1cm）の後に、斜位のユビナデを加える。またヘラナデによって平滑になっている部分もある。内面調整は斜位のユビナデである。胎土は粗砂を多量に含み、チャート、石英、長石、酸化鉄粒、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

3 人物埴輪の特徴

○盾持ち人埴輪

160は盾持ち人埴輪の盾鱗部である。4 T 造出の注記がある。板状に作り、円筒側面の前よりの位置に貼り付けたもので、接合面には補強用の粘土が貼り足されている。鱗の出は上部で4.5 cm、下部で3.5 cmであり、少し上広がりである。鱗の出が小さく、かつ円筒が細いことから器財埴輪の盾ではなく、盾持ち人に付く盾と推定した。盾面にはヘラ描き沈線によって1本の斜線を挟む2本の水平線が引かれており、変形鋸歯文と推定される。表面調整は左上り→右上り→左上りとナナメハケ（14本／1.8cm）を交互に施し、最後に斜位のユビナデを部分的に加えている。裏面調整はナナメハケ（12本／1.4cm）の後にタテハケを重ねている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通で少し粉っぽい。色調は表面がくすんだ淡橙褐色、裏面が灰褐色を呈する。

161は160とは同工別個体の盾持ち人埴輪の盾鱗部である。4 T 造出の注記がある。板状に作り、円筒側面の前よりの位置に貼り付けたもので、接合面には盾面となる補強用の粘土が貼り足されている。鱗の出が小さく、かつ円筒の復原径が14 cmと細いことから器財埴輪の盾ではなく、盾持ち人に付く盾と推定した。復原全幅は20 cmであるが、円筒部が楕円筒であれば、もう少し幅は大きくなる。盾面にはヘラ描き沈線によって中心部に方形区画、鱗部に変形鋸歯文を引く。表面調整はいったんナナメハケ（10本／1.2cm）を施した後に、化粧用粘土を薄く貼り足して最終的な調整を行っていること



第8图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図5

が、剥離面によって把握できる。裏面調整はナメハケ（5本/0.7cm）を施した後に、これをナデ消している。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。また、表面化粧粘土には大粒の酸化鉄粒を多く含む。焼成はやや軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

○人物の冠帽

171は人物の冠帽部分と推測される。池の注記がある。下位での復原直径は10cmあり、垂直に立ち上がった後に、外反しながら開く。外面には等間隔に引かれた3本の沈線があり、赤彩の痕跡も残る。成形は粘土紐巻き上げ成形で一連に製作する。外面調整はタテハケを縦位のユビナデで擦り消す。内面調整は下部では斜位、上部では縦位のユビナデである。胎土は細砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

○人物後頭部

172は人物後頭部で、3 T内堀の注記がある。頭頂部は閉塞しないで、いったん端部を調整し、帽子または頭髪を表現する粘土を被せることによって閉塞する。女子の髻の形状とは異なるので男子となろう。成形は紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（5本/0.9cm）であるが、上に被せた部分はナデ仕上げである。内面調整は斜位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は普通、色調は橙褐色を呈する。

○人物頭髪部

173は人物頭髪部で、注記はない。半球形になることが推定される残存率10%の小破片で、復原直径は16cmである。外面に等間隔の沈線が放射状に引かれている。成形は粘土紐巻き上げ、内外面の調整は横位ナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。色調は茶褐色を呈する。

○人物垂髪部

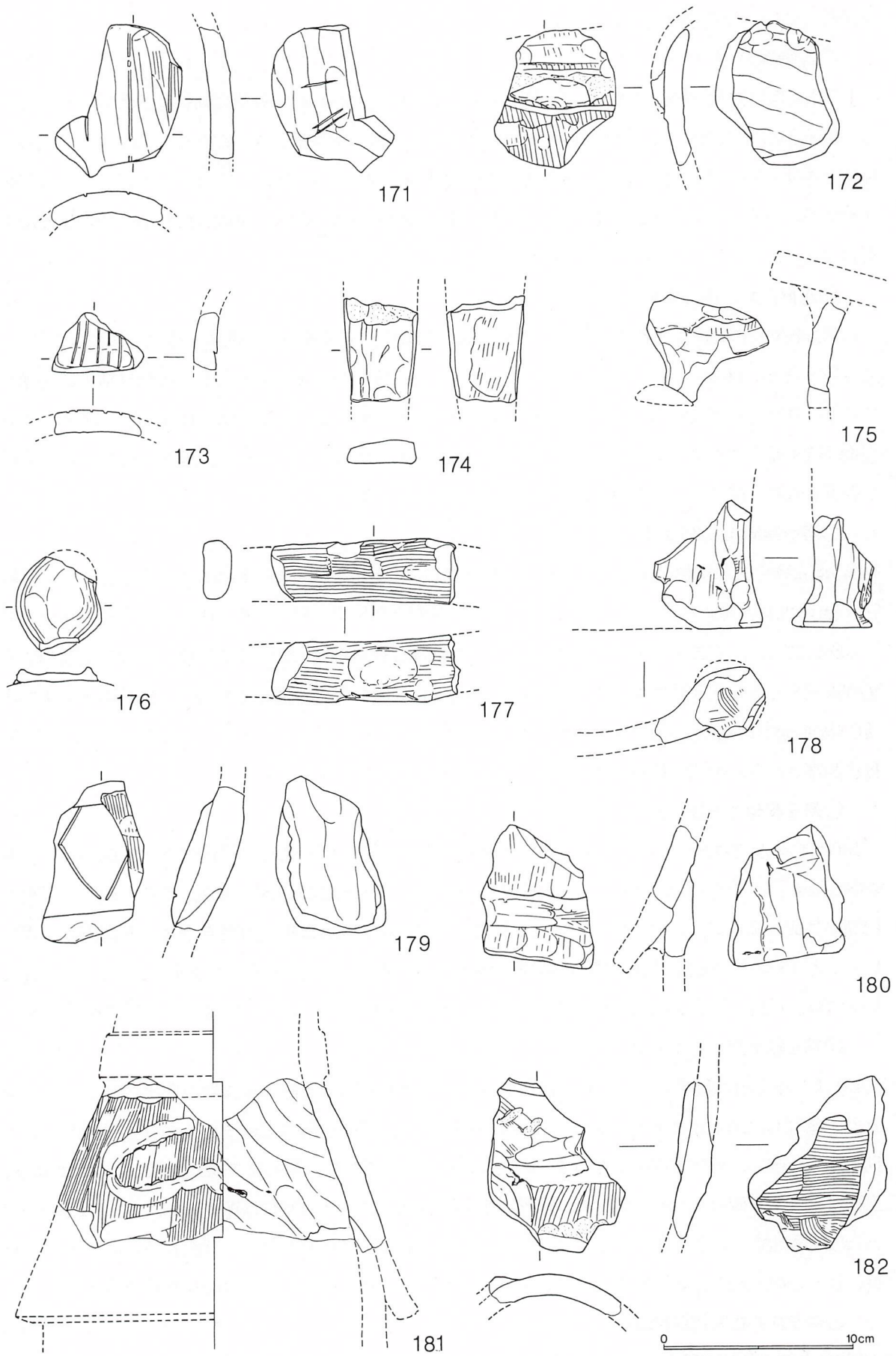
174は人物垂髪部で、第3次内堀13 Tの注記がある。長方形の板状で、下方に向かって幅を減じている。内側には圧着した痕跡がある。成形は板作り、外面調整は縦位ケズリで、ユビオサエが加えられている。内面調整はタテハケ（13本/1.8cm）である。胎土は粗砂を多量に含み、凝灰岩粒、チャート、長石、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質、色調は赤褐色を呈する。

○女子前額部

175は女子前額部で、池の注記がある。上部には髻の剥離した痕跡が残る。下部には眼孔の上辺が残る。左眼となろう。眉の表現ははっきりしない。残存率25%で、復原直径は10cmである。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケの後に丁寧なナデを加える。内面調整はユビオサエとユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。色調は外面が橙褐色、内面は還元がかかって灰色を呈する。

○人物耳部

176は人物耳部で、造出の注記がある。薄い楕円形の平坦な板を転がして周縁部を厚くし、さらに内側をユビナデで窪ませて成形している。周縁部は断面台形の凸帯状を呈する。裏面には頭部からの剥離痕がある。環状の耳表現と異なり、かなり写実的といえる。外面の調整はユビナデである。胎土は粗砂を多量に含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成は軟



第9图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図6

質で粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

○人物佩刀

177は人物の佩刀と推測される。第3次内堀13Tの注記がある。板状で細長く、両端は欠けている。断面形は長楕円形で、側面は丸く収められている。裏面中央部に浅く窪む圧着痕があり、人物の佩刀と推定した。成形は板作り、内外面の調整は長手方向のハケ(8本/1.2cm)である。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、石英、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好で、色調は赤褐色を呈する。

○座像人物に伴う椅子

178は座像人物の椅子と推測される。内堀の注記がある。弧を描いて湾曲する座面の端部は肥厚し、丸く収められ、前面にはラッパ状に開く飾りが付く。胡床に類するものである。成形は粘土紐を連ねており、内外面の調整はナナメハケの後にユビナデを加えている。端部の飾りは作業台に圧着して平坦面を作り出したものを取り付けている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成にして堅緻で、色調は暗赤褐色を呈する。

○帯を締めた人物腰部1

179は人物の腰部で腰帯を伴っている。注記はない。少し外反しながら斜めに立ち上がる腰部には幅7.0cmの大帯が貼り付けられており、ヘラ描きの菱形文が施文されている。成形は粘土紐巻き上げであるが、裾部の上端を外下がりの斜面とし、一旦乾燥を行った後に、そこに接続して腰部を製作する工程が窺われる。外面調整はタテハケ(5本/1.0cm)を施してから帯を貼り付け、横位のナデを加える。内面調整は横位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

○帯を締めた人物裾部

180は半身人物の裾部である。6T1区1層の注記がある。製作工程は円筒台部の上端を外下がりの斜面とし、一旦乾燥した後に、裾部を接合している。この裾部は体部と一連であり、後期に通有の円筒の外側に裾部のみを貼り付ける方式とは異なっている。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は浅いタテハケ(3本/0.7cm)、内面調整は強い縦位ユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒、チャート、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

○帯を締めた人物腰部2

181は半身人物の腰部である。池の注記がある。残存率40%の破片から反転復原実測を行った。復原最大直径は18.0cmである。製作工程は180と同じく、円筒台部の上端を外下がりの斜面とし、一旦乾燥した後に、裾部を接合している。正面には八の字形を呈する帯の結び緒の剥離した痕跡があり、上部には帯の下側のヨコナデが残る。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整は細かいタテハケ(13本/1.3cm)、内面調整は斜位の強いユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、凝灰岩粒、チャート、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが、少し粉っぽい。色調は淡赤褐色を呈する。

○帯を締めた人物腰部3

182は人物の腰部で腰帯を伴っている。4Tの注記がある。少し外反しながら斜めに立ち上がる腰部には最大幅5.6cmの大帯が貼り付けられており、その直下に粘土貼付け表現がある。平面形が丸みを

帯びるので鏡の可能性も考えられるが、残存部が少なく、確定的ではない。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（8本/1.8cm）を施してから帯を貼り付け、横位のナデを加える。内面調整はヨコハケ（7本/1.5cm）である。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好にして堅緻である。色調は外面が淡黄褐色、内面が還元がかって暗灰褐色を呈する。

○双脚人物裾部

183は双脚人物の裾部である。5 T 1 区表土の2片が接合した。製作工程は円筒状の脚部外面に粘土を貼り足して裾を表現するものである。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（5本/0.8cm）の後に裾部を貼り付け、横位ナデ調整を加える。内面調整はタテハケの後に縦位ユビナデを重ねる。胎土は細砂を少量含み、石英、長石、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

184は183と同一個体の双脚人物の裾部である。6 T 2 区北拵2層と6 T 2 区南拵表土の2片が接合した。本体から剥離した上着の裾部である。断面観察によって、本体に補強用の粘土を貼り足してから、裾部を接合していることが明らかである。外面調整はヨコナデ、内面には本体からの剥離痕が残るが、ハケメははっきりしない。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、角閃石、輝石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。

185は183・184と同一個体の双脚人物脚部から裾部にわたる破片である。6 T 2 区北拵2層と5 T 1 区表土の2片が接合した。円筒状の脚部外面に粘土を貼り足して裾を表現するものである。断面観察によって、本体に補強用の粘土を貼り足してから、裾部を接合していることが明らかである。残存率30%の破片からの脚部復原直径は10.4 cmである。成形は粘土紐巻き上げ、脚部の外面調整はタテハケ（13本/1.8cm）、内面調整は縦位の強いユビナデ、裾部外面はヨコナデである。胎土は細砂を少量含み、石英、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、角閃石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈する。なお、外面には凍結が原因と推測される剥離痕がある。

4 鳥形埴輪の特徴

○鶺鴒形埴輪

186は鶺鴒形埴輪の頸部である。注記はない。中実製作で現存長15.1 cmあり、わずかに湾曲する。中程での直径は5.3 cmある。下端部は臍となっており、中空製作の体部に固定されていたと推測される。外面上部には粘土紐とその剥離痕が並んでおり、鶺鴒の首に付ける紐の結緒表現と見て誤りないであろう。成形はヨコハケ状に見えるのが作業台の木目であることから、粘土を転がして行っており、外面調整はタテハケを施した後に長手方向のナデを加える。胎土は細礫と粗砂を少量含み、チャート礫、凝灰岩粒、石英、角閃石、酸化鉄粒、黒色粒が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は淡赤褐色を呈する。

○鶺鴒形埴輪

187は鶺鴒形埴輪の頸部から頭部である。4 Tの注記がある。中空製作で現存長20.0 cmあり、直立する。頸部の直径は7.0 cmある。頭部は嘴の部分が頸部に接続しているが、眼を含む破片は接合しないので、復原的に入れ込んである。嘴は下嘴を製作してから、その上に上嘴を被せる製作手法を採

ており、嘴の合わせ目が表現されている。先端を欠くが、鋭く尖るとみてよい。上側には前方から棒刺突を行って、2個の鼻孔を表現している。眼は外部から竹管状のもので刺突穿孔している。眼を含む破片をこの位置に想定すると、頭頂部が中軸上に来ずに、反対側に及んでしまう。あるいは鶏冠が側方に傾斜して表現されていたものか検討課題が残る。なお、鶏冠・肉垂れ・耳の部分は残存していない。成形は粘土紐巻き上げによるが、縦方向に綴じたようなユビオサエ痕が内面に顕著に見られるため、切開技法を用いている可能性がある。頸部の外面調整はタテハケ（8本／1.1cm）を施した後に上部にのみ長手方向のユビナデを加える。内面調整は下部と上部では横位ナデ、中間部では縦位のユビナデである。頭部の外面調整はヨコハケの後に横位ナデを加える。内面は主に斜位ナデで、調整は丁寧である。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、チャート、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽい。色調は乳褐色を呈する。

○水鳥形埴輪

188は水鳥形埴輪の頸部である。5 T 1区表土の注記がある。中実製作で現存長7.3cmあり、中間部で強く湾曲する。中程での復原直径は4.0cmある。その形状から見て水鳥形埴輪となることは誤りないであろう。成形は非粘土紐巻き上げ成形であり、粘土板を丸めて絞り成形したものらしい。外面調整は長手方向のユビナデ、内面は未調整で、絞り目のみが残る。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は淡茶褐色を呈する。

189は188と同一個体の水鳥埴輪の首の付根から胸部である。粘土板を絞り成形し、角張った形状を呈する。外面調整はハケ調整後に長手方向の丁寧なユビナデを加える。内面は未調整で、絞り目のみを残す。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は淡茶褐色を呈する。

190は188・189と同一個体の右側体部で、貼り付け表現の翼が剥離している。翼の形状は木の葉形を呈する。成形は粘土紐積み上げで、外面調整は長手方向のハケ調整（10本／1.5cm）を施した後に、翼を貼り付け、周縁部にナデ調整を加えている。内面は雑なユビナデである。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は淡茶褐色を呈するが、翼の剥離面は黒色である。なお、他に3片の同一個体片があり、6 T 1区北壁が1点、5 T 1区表土が2点である。

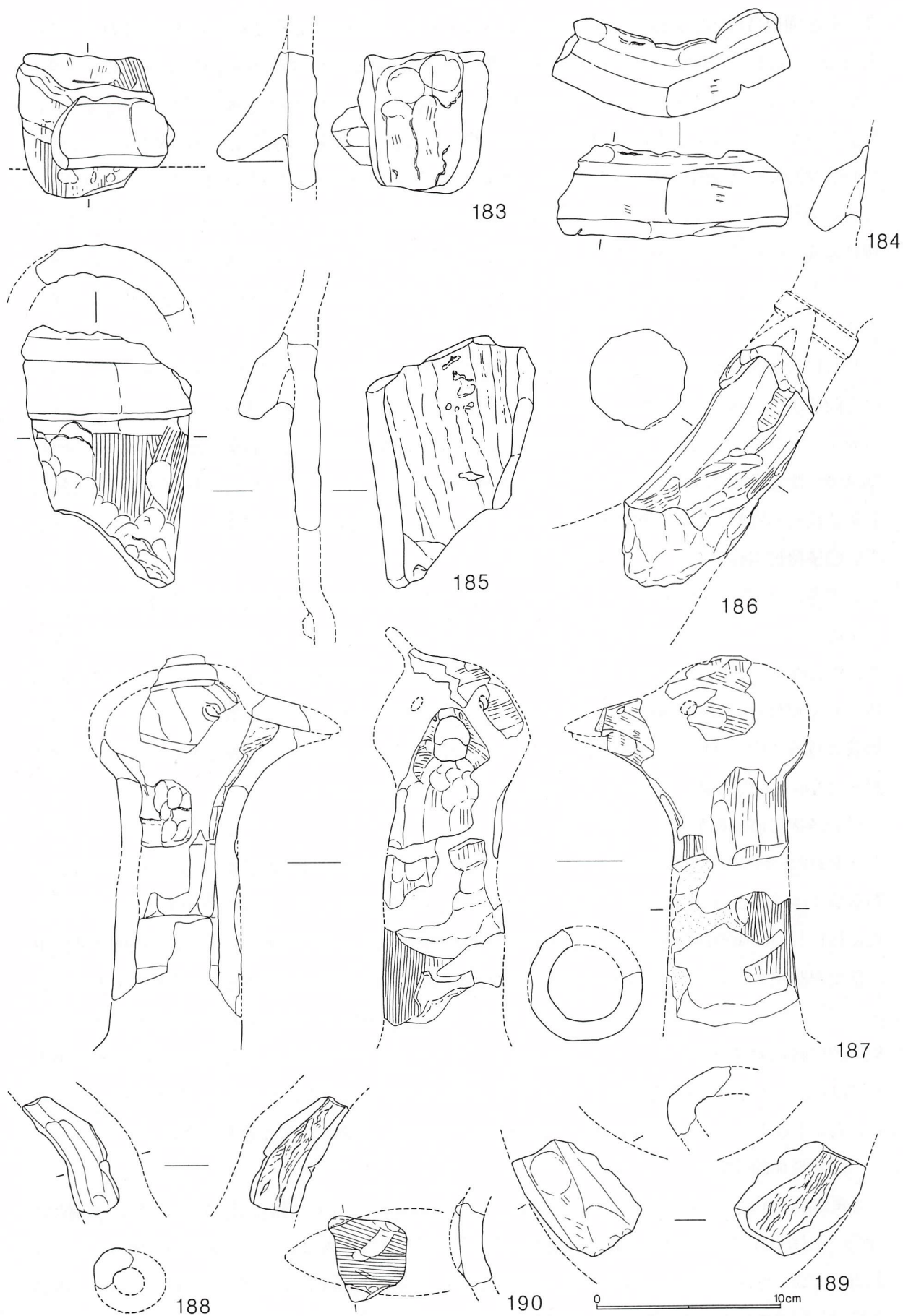
○鳥形埴輪頸部

219は鳥形埴輪の頸部と推定される。池の注記がある。残存率45%の破片から反転復原実測を行った。復原直径は5.2cmである。中間で少しくびれる形状を示す。長くなることが推測されるので、水鳥か鶏となろうか。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケの後に縦位のなでを加える。内面調整は縦位ユビナデである。胎土は細砂を少量含み、チャート、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好にして堅緻。色調は外面が暗灰茶褐色、内面が暗灰褐色を呈する。

5 猪鹿形埴輪の特徴

○鹿形埴輪

191は鹿形埴輪の頸部である。池の注記がある。直線的に長い頸部であり、現存長は17.0cmを測



第10图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図7

る。横断面形は楕円形で長径の復原値は14.1 c mである。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（10本／2.0cm）の後にユビナデを部分的に加えている。内面調整は斜位のナデで、頭部を取り付ける正面側上端のみ縦位ナデとする。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石が観察される。焼成はやや軟質で粉っぽい。色調は外面が淡橙褐色、内面が橙褐色を呈する。

192は鹿角部で、注記はないが191と同一個体とみられる。幹角から剥離した枝角であり、現存長4.7 c m、直径1.0 c mを測る。先端は欠けている。成形は粘土を転がして行い、幹角との接合部には上側に補強用の粘土を貼り足している。外面調整は丁寧なナデである。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通だが粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

193は191と同一個体の鹿形埴輪左体側部である。池の注記がある。現存長は27.7 c mある。ハケメの方向性から、向かって左上に頸部の付くことが判る。成形は粘土紐積み上げで、外面調整は胴部ではヨコハケ（9本／2.1cm）、頸部の付根ではナメハケを施す。内面調整は胴部では左上りのユビナデ、頸部の付根では縦位のユビナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石が観察される。焼成は普通だが少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

○子猪形埴輪尻尾1

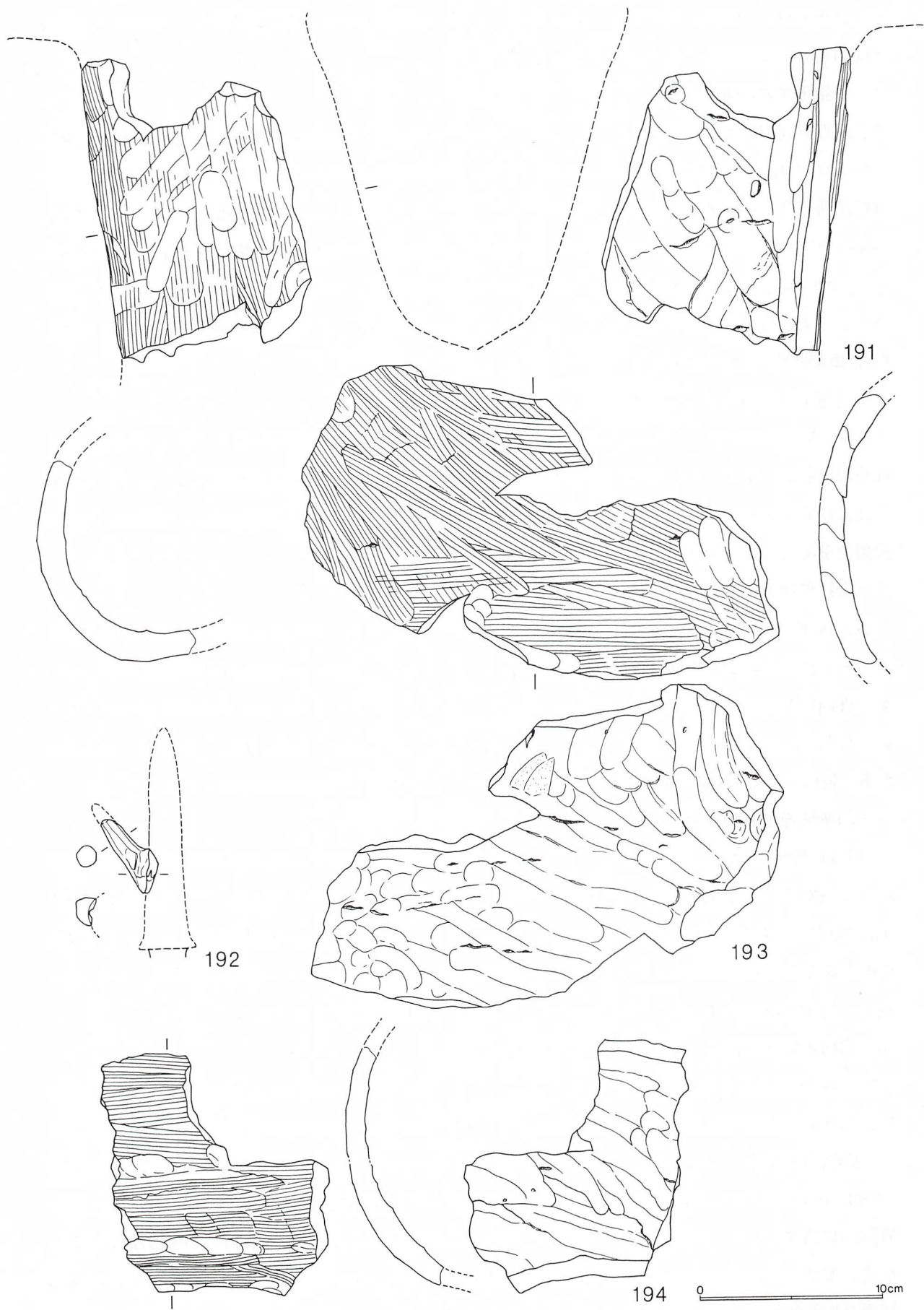
196は猪形埴輪の尻尾部で、4 Tの注記がある。中空式の尻尾は下向きなので猪か鹿の可能性はあるが、かなりの小型品のため、子猪と推定した。成形は内面の観察から、体部製作の最終段階において、尻に開いている穴に、粘土紐を巻き上げて中空製作した尻尾を嵌め込んで閉塞していることが判る。外面調整は尻尾の根元に向かうユビナデ、内面調整は施されておらず、粘土紐とユビオサエ痕が顕著に残る。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒、雲母が観察される。焼成は良好だが少し粉っぽい。色調はくすんだ赤褐色を呈する。

○子猪形埴輪尻尾2

197は猪形埴輪の背から尻尾部で、4 Tの注記がある。中実式の尻尾の形状から猪か鹿の可能性はあるが、体幅20 c m未満と推定される小型品のため、子猪と推定した。平坦な背中から丸みを帯びた尻に移行し、尻尾を挿し込むための孔に内側から粘土棒を挿し込んで尻尾とし、外側の周囲に補強用の粘土を貼って固定している。尻尾の断面形は偏円形で水平に伸びた後に下を向くと推測されるが、先端を失っている。外面調整はナメハケ（5本／1.3cm）の後にナデを加える。内面調整は体部では粗い木口状工具によるハケ（7本／3.0cm）後に、斜位のユビナデを加える。尻尾の内面は調整が施されておらず、ユビオサエ痕が顕著に残る。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英が観察される。焼成は良好、色調は表面が橙褐色、器肉は淡灰褐色を呈する。

○猪形埴輪頸部

198は猪形埴輪の左前脚部付近から頸部で、4 T造出の注記がある。猪と認定するのは猪の脚部215と同一個体であることによる。破片は脚部へ向かって窄まるとともに、頸部が緩やかに傾斜しながら前方に伸びる形状を呈する。成形は粘土紐積み上げによって体部成形後に頸部を成形している。外面調整は斜位のユビナデで、脚部から頸部正面と頸部側面から頭部方向へ向かっている。内面調整は体部では縦位の、頸部では頸部から頭部に向かう斜位のユビナデを施す。胎土は細礫と粗砂をやや多く



第11图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図8

含み、チャート、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は表面がくすんだ赤褐色、器肉は暗茶褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 1

209は猪の脚部で、池の注記がある。残存率40%の破片から反転復原実測を行った。足と付根を含まないので中位と見られる。復原直径は11.6 cm、器肉の厚さは1.0 cmで、薄手の製作である。成形は粘土紐巻き上げと推測される。外面調整はタテハケ（11本/2.1cm）、内面調整もタテハケ（8本/1.8cm）で、所々にユビオサエ痕を残す。猪形埴輪の脚部としたのは、217の猪形埴輪足と同一個体であることによる。胎土は細砂を少量含み、酸化鉄粒、凝灰岩粒、石英、角閃石が観察される。焼成は良好、色調は橙褐色を呈する。なお、内外面のハケ調整具は異なっており、外面用は先端が丸い凹面、内面用は先端が丸い凸面であることが推測される。

○猪形埴輪脚部 2

210は猪脚部の蹄で、4 Tの注記がある。基底部を逆U字形に切り込み、さらに粘土を貼りつけて蹄を表現したもので、古い時期の猪形埴輪の特徴といえる。内外面の調整は横位ユビナデである。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は橙褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 3

212は猪脚部の蹄で、4 Tの注記がある。210と同一個体である。基底部を逆U字形に切り込み、さらに三角錐形の粘土塊を貼りつけて蹄を表現したものである。底面には作業台の木目圧痕が付いている。外面調整は粗いタテハケ（5本/1.0cm）の後に斜位のユビナデを加える。内面調整は横位ユビナデである。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石、角閃石、輝石のほか細かい微量の海面骨針が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は橙褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 4

213は猪脚部の蹄を含む基底部で、4 Tの注記がある。210及び212と同一個体である。円筒の下端に三角錐形の粘土塊を貼り付けて、蹄を表現し、その内側を逆U字形に切り取っている。底面には作業台の木目圧痕が付いている。外面調整は粗いタテハケ（6本/1.8cm）の後に斜位のユビナデを蹄部に加える。内面調整は斜位ユビナデである。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、角閃石が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は橙褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 5

214は猪脚部の蹄を含む基底部で、池の注記がある。210・212・213とは別個体である。脚部を成形し、内外面の調整を完了後に、刀子で縦方向に2箇所を切開し、直径を減じてから切開面同志を接合する切開技法が用いられている。本資料の場合、切開面で剥離してしまっている。蹄は円筒下端部を内側から前方に押出した後に粘土塊を貼り付けて製作したものだが、本体から離脱して失われている。外面調整はタテハケ（8本/1.7cm）の後に、蹄の付根外周部にユビナデを加える。内面調整はタテハケで、後から下底部に幅広く粘土を貼り足して補強を行っている。おそらく脚部製作途上で、下端部に歪みか亀裂が生じたことに対する処置であろう。胎土は粗砂を少量含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成は普通、色調は橙褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 6

215は猪脚部の蹄を含む下部半部で、4 Tの注記がある。198と同一個体である。円筒の下端に三角錐形の粘土塊を貼り付けて、蹄を表現し、その内側を逆U字形に切り込んでいる。その切り込み方はシャープでなく、棒状のものでこじ開けたように見える。器肉の厚さは1.9 cm前後あり、脚部2～5に比して厚手の製作である。外面調整は粗いタテハケ（4本/0.7cm）の後に縦位の強いナデを加えて、ほぼ完全に擦り消している。内面調整はナナメハケ（8本/1.8cm）の後に斜位ユビナデを加える。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、酸化鉄粒（大粒）、石英、凝灰岩粒、角閃石が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調はくすんだ暗茶褐色を呈する。作り、調整法、色調の違いから第3の猪と推定できる。

○猪形埴輪脚部 7

216は猪の脚部で、池の注記がある。残存率は30%である。209と同一個体である。上広がり形状から見て胴に取り付く位置に近いと推測される。復原直径は上端で13.0 cm、下端で10.0 cmである。成形は粘土紐巻き上げで、切開技法を用いており、切開面の一部が残る。外面調整はタテハケ（10本/2.3cm）、内面調整はナナメハケ（7本/1.6cm）で、接合部に強いユビナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、チャート、石英、酸化鉄粒、凝灰岩粒、角閃石、輝石が観察される。焼成は普通、色調は橙褐色を呈する。

○猪形埴輪脚部 8

217は猪脚部の蹄を含む基底部で、池の注記がある。214と同一個体である。残存率25%の破片から復原実測を行った。復原底径は10.4 cmである。円筒の下端に粘土塊を貼り付けて、蹄を表現するが、大部分が剥離している。内面調整後に内側下端部に粘土帯を貼り足す手法は214と共通している。外面調整はタテハケ（7本/1.2cm）の後に底部付近にユビナデを加える。内面調整はナナメハケ（7本/1.2cm）で、底部に貼り足した粘土帯には横位のナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、酸化鉄粒、凝灰岩粒、石英、鉄石英が観察される。焼成は普通で、少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

6 犬形埴輪の特徴

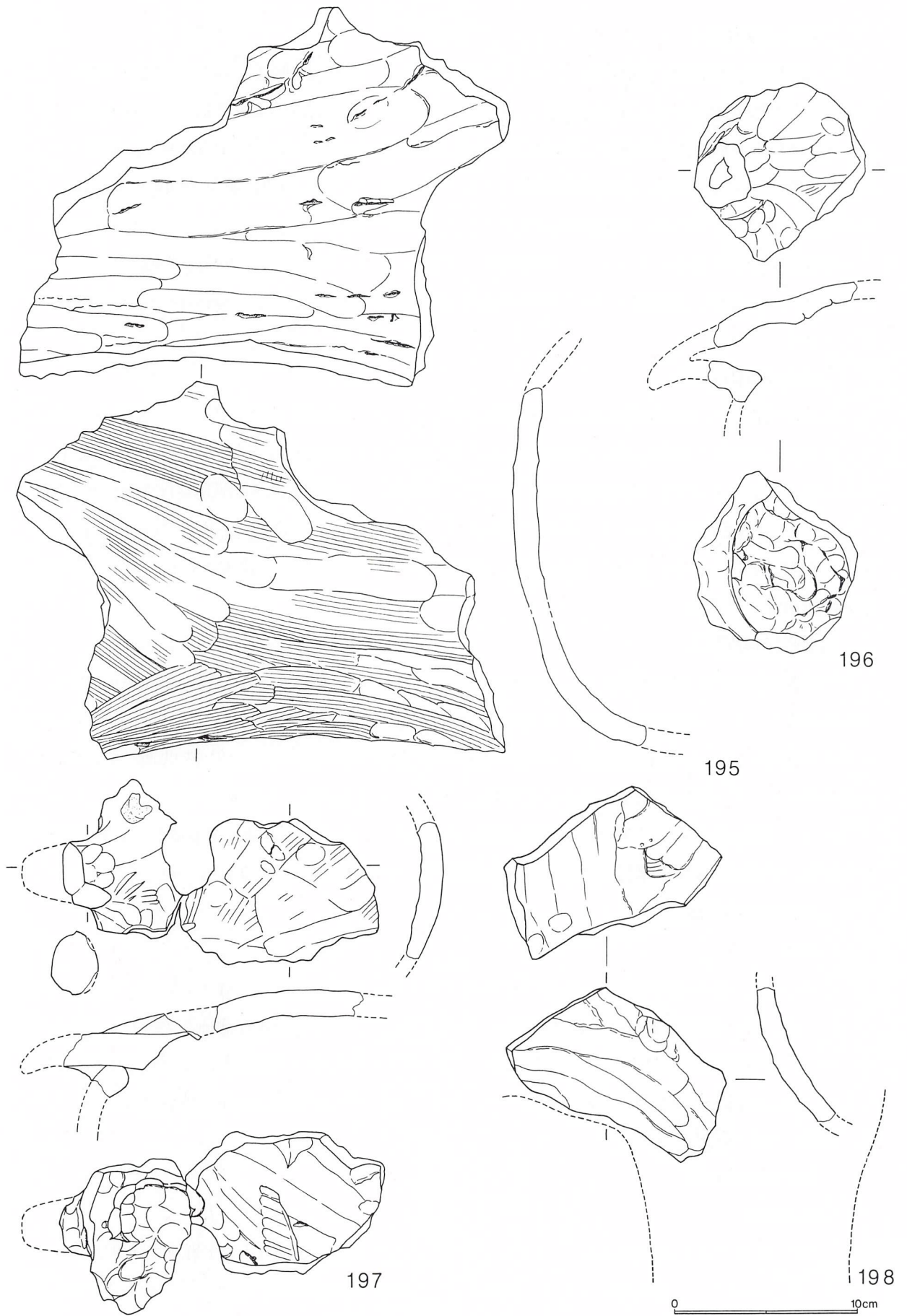
○尻尾

211は尻尾で、池の注記がある。直径1.5 cmほどの手捏ねの粘土棒を3回振っている。根元と先端を欠く。馬、猪、鹿の尻尾とは異なっており、巻尾であることから犬の尻尾とみて誤りないだろう。ちなみに、瓦塚古墳からは体部に比して小さい、この種の尻尾を持つ犬形埴輪が出土しており、参考になる。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は淡赤褐色を呈する。

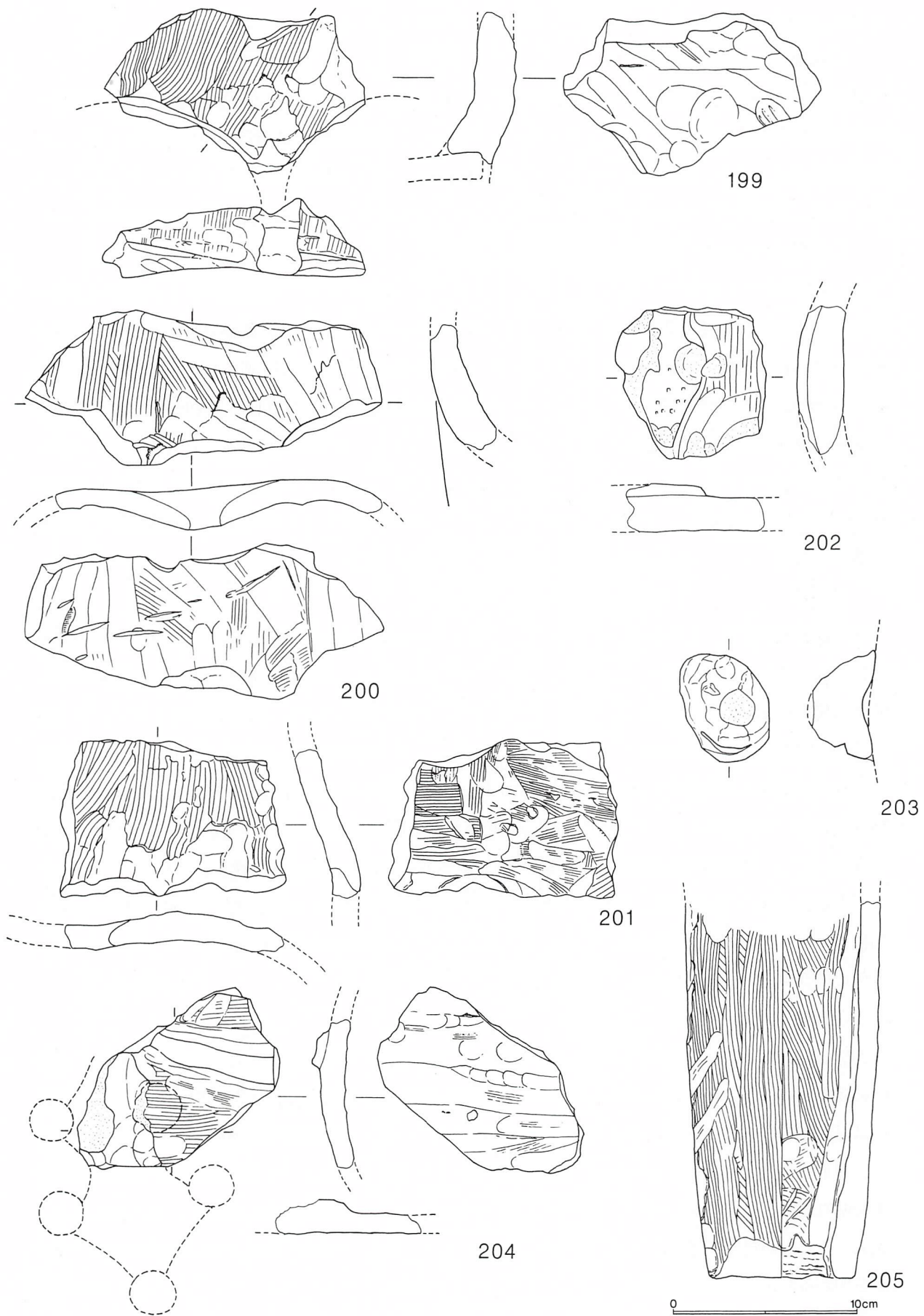
7 馬形埴輪の特徴

○鞍と鞍褥

202は鞍の破片で4 Tの注記がある。居木の付近に半円形の粘土を貼りつけて鞍褥を表現し、断面四角形の棒を刺突して、刺し縫いを示す。鞍褥と合せた器肉は2.5cmあり、厚手の作りである。成形は粘土紐積み上げ、外面調整はタテハケ（6本/1.3cm）の後にナデを加えている。内面調整は主軸方向の丁寧なナデである。胎土は粗砂を多量に含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察



第12图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図9



第13图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図10

される。焼成は普通で少し粉っぽい。色調は明赤橙褐色を呈する。

○馬鈴

203は大型の馬鈴で注記はない。半球形を呈し、直径6.0 cm、高さ3.4 cmを測る。下側に2回のヘラ切りを加えて鈴口を示す。成形は粘土塊より手捏ねし、裏面中央部は拇指のユビオサエで窪む。外面調整はユビナデで、裏面には本体からの剥離痕がある。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒が観察される。焼成はやや軟質で、粉っぽい。色調は淡褐色を呈する。

○杏葉の付く尻繫

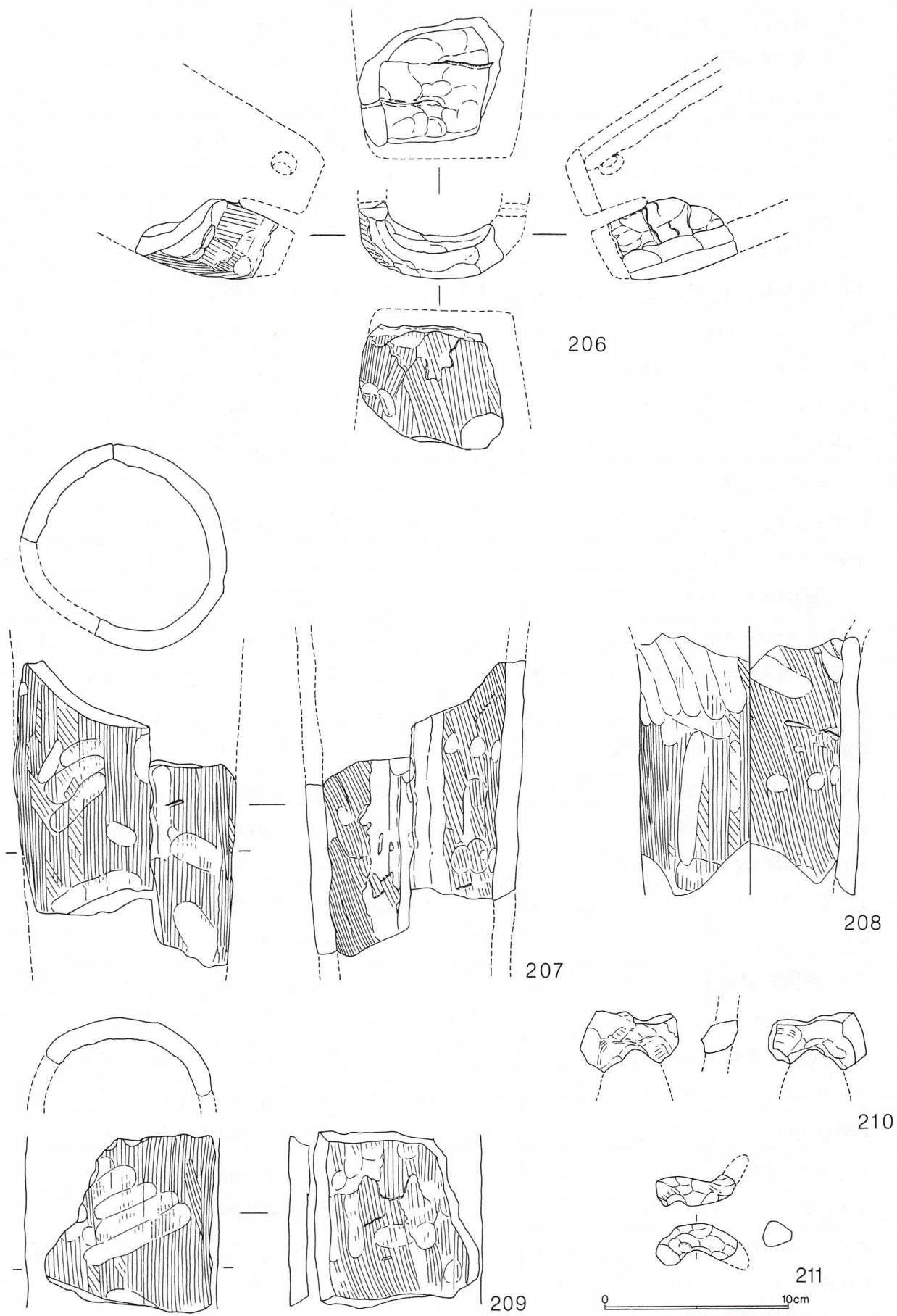
204は杏葉の付く尻繫で、池の注記がある。本体は尻の部位のため、丸みを帯びる。断面M字形の低い凸帯を貼り付けて尻繫を表現し、その下に接して粘土を貼りつけて杏葉を示す。その形状は剣菱形であり、鈴の剥離した痕跡があるため、5鈴の剣菱形杏葉であったと推測される。器肉の厚さは平均1.3 cmで、薄手の製作である。成形は水平方向の粘土紐積み上げを行う。外面調整はヨコハケ(11本/2.5cm)、内面調整は横位ユビナデで、尻繫はヨコナデ、杏葉には周縁部にユビオサエ、表面にナデが加えられている。胎土は粗砂をやや多く含み、石英、長石、チャート、角閃石、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好にして堅緻で、還元がかかる。色調は外面がくすんだ淡褐色、内面が紫灰色を呈する。

○脚部

205は馬の脚部で、4 T 造出の注記がある。残存率40%の破片から反転復原実測を行った。復原底径は8.0 cmで、上方に向かって徐々に径を増す。現存高は20.8 cmある。現存部には蹄の表現はない。成形は幅3 cmほどの輪を基部とし、その上部から粘土紐を巻き上げる。内面調整終了後に、縦方向に2箇所を切って、直径を減じた上で、接合している。いわゆる切開技法である。切開面が平坦な面として現存しているが、糸ずれの痕がないので工具は刀子であろう。接合部は少し尖っている。外面調整はナメハケの後にタテハケ(6本/1.2cm)を重ねる。内面調整はタテハケで、所々にユビオサエ痕を残す。また、切開面同志の接合部には長いユビナデを加えている。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒、酸化鉄粒のほか海面骨針1点が観察される。焼成は良好、色調は暗赤褐色を呈する。なお、『埼玉稲荷山古墳』報告書58図7とは切開技法が共通するが、ハケ原体が異なり、本例のほうが細いといった相違点があり別個体であろう。

○頭部

206は馬の頭部で、4 T 造出No. 7の注記がある。下顎の破片で、口の切り込みを伴い、側面には鏡板の剥離痕がある。先端での復原幅は8.5 cmで馬形埴輪としては比較的小型の製作である。横断面形はU字形を呈する。また、前方は現状では開放されているが、剥離痕があるので、粘土板で閉塞して、鼻面を表現していたとみられる。成形は鼻先から粘土紐を巻き上げて芯を製作し、その外側に粘土を貼り足して仕上げている。このことから、別体製作の芯を頸部に接合した後に、粘土を被せて、完成したことが推定できる。外面調整は長手方向のハケ(9本/1.9cm)調整、内面調整は雑なユビナデを加えるが、粘土紐痕を顕著に残している。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、角閃石が観察される。焼成は普通、色調は橙褐色を呈する。



第14図 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図11

8 種を特定できない四足獣埴輪の特徴

○四足獣埴輪体部 1

194は四足獣埴輪の腹部で、4 T 造出の注記がある。縦断面では中央部がくびれる。非粘土紐巻き上げ成形であり、脚部を繋ぐために一体的に成形したものと考えられる。外面調整はヨコハケ（9本／1.8cm）、内面調整は斜位のユビナデである。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒、石英、長石が観察される。焼成は普通だが少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

195は194と同一個体の四足獣埴輪左体側部で、造出部 4 T の注記がある。現存高20.8cmあり、胴部の上下幅は25cm前後となろう。ハケメの方向性から、向かって左上に頸部が、そして左下に左前脚の付くことが判る。腹部はわずかにくびれている。かなりの大型動物埴輪でありながら、馬具の表現は一切ないので、猪か鹿となるが、前者の可能性が高いと推定している。成形は粘土紐積み上げだが、粘土紐を水平に積んでいるのは胴部であり、頸部の付根では斜めに積んでいる。外面調整は胴部ではヨコハケ（8本／1.7cm）、頸部の付根では斜位のユビナデ後にナナメハケを施す。また前脚の付根では逆傾斜のナナメハケとする。内面調整は胴部では横位、頸部の付根では斜位のナデを施す。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、凝灰岩粒、酸化鉄粒、石英、長石が観察される。焼成は普通だが少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

○四足獣埴輪体部 2

199は四足獣埴輪の股部で、4 T の注記がある。左右脚部の離脱根があり、股間に性器の表現はなく、前脚後ろ側部分の可能性が高い。脚部付根の復原直径は18cmである。また、両脚の間隔はわずかに1cm強である。このことから、体幅は40cm強と推測される。器肉も2.2cm前後あって、厚手の製作である。大型の動物埴輪であり、馬の可能性が高い。成形は左右の脚部を繋ぎ、補強粘土を貼り足して堅固に固定した後に、横方向の粘土紐を連続的に積み重ねて腹部を製作している。外面調整は前後方向のハケ（13本／3.0cm）、内面調整はユビナデで、ユビオサエ痕も残る。脚部の離脱部にはタテハケの雌型が明瞭に残る。胎土は粗砂をやや多く含み、チャート、石英、長石、凝灰岩粒が観察される。焼成は良好で、外面は還元がかっている。色調は外面が紫灰色、内面はくすんだ橙褐色を呈する。

○四足獣埴輪体部 3

200は四足獣埴輪の胸部から前脚の付根で、第3次内堀 4 T の注記がある。2本の脚部をわずかに離して置き、その上部前面を繋ぐように粘土を貼り足して胸部としている。この部分では脚部の上端は水平でなく、舌状に突出させていたとみられる。復原体幅は22cmであり、小型の動物埴輪となる。胸繋の表現がないことから、猪、鹿、犬のいずれかとなるが、胸の立上り角度から鹿か犬となろう。大きさからは後者の可能性のほうが高い。外面調整はタテハケ（10本／1.9cm）で、脚部の付根ではユビナデを加えている。内面調整はタテハケとナナメハケ（8本／1.7cm）調整後に縦位の強いユビナデを加える。胎土は細礫と粗砂をやや多く含み、チャート、酸化鉄粒、凝灰岩粒、石英が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

○四足獣埴輪体部 4

201は四足獣埴輪の胸部から前脚の付根で、池の注記がある。2本の脚部をわずかに離して置き、

その上部前面を繋ぐように粘土を貼り足して胸部としている。この部分では脚部の上端は水平でなく、舌状に突出させていたとみられる。脚部付根の復原直径18cm、復原体幅は40cm強であり、大型の動物埴輪となる。現存部に胸繫の表現はない。胸部の立上り角度から猪の可能性はなく、馬か鹿となろう。外面調整は布を伴うナデの後にタテハケ（10本/2.5cm）を施す。内面調整は表と異なる細かい原体のヨコハケ後に、部分的なユビナデを加える。胎土は細礫と粗砂を少量含み、チャート礫、石英、長石、酸化鉄粒が観察される。焼成は良好にして堅緻、色調は外面がくすんだ橙褐色、内面が淡褐色を呈する。

○四足獣埴輪脚部1

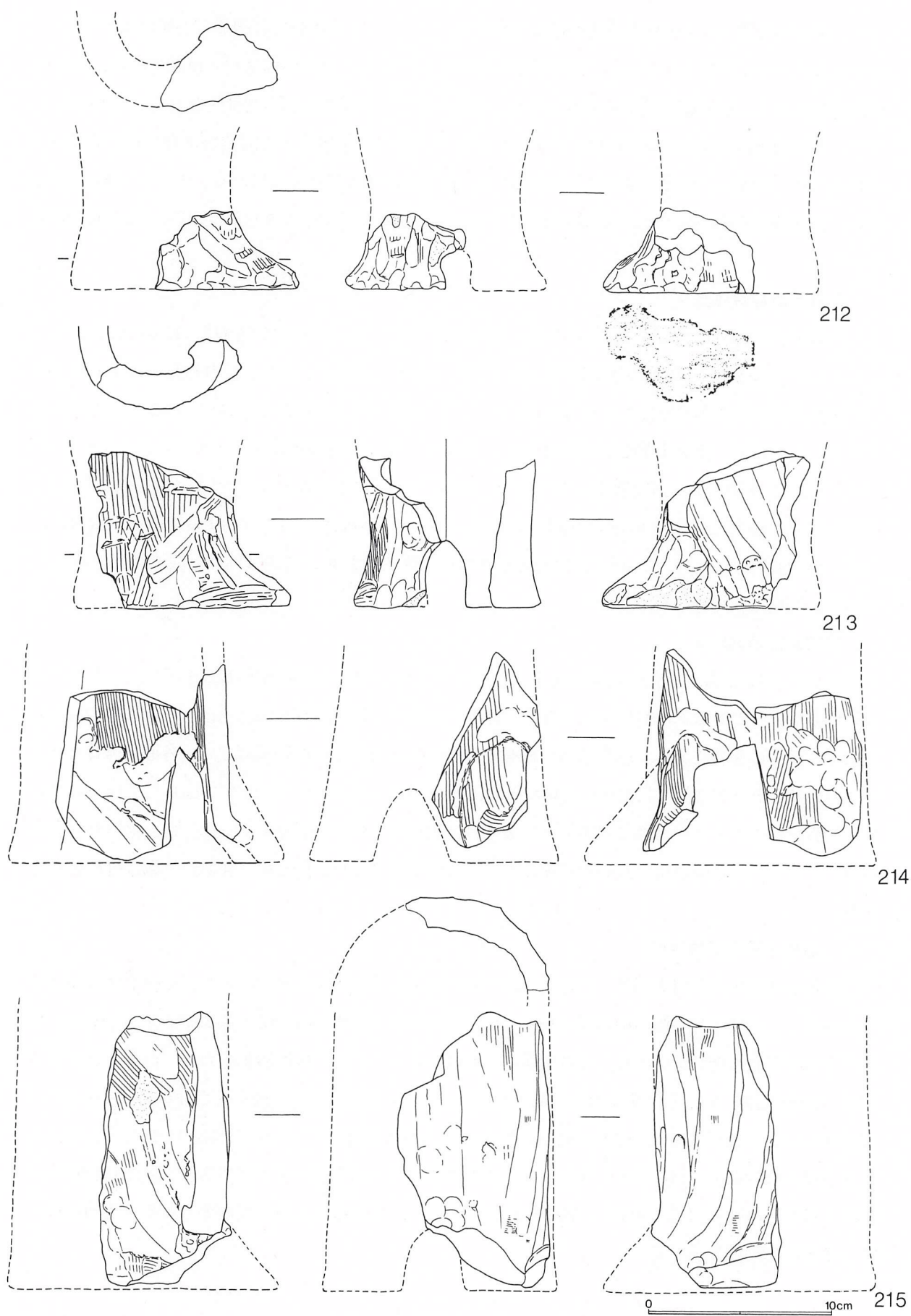
207は四足獣の脚部で、池の注記がある。残存率は70%あり、中間部での直径は12.0cmを測る。上方に向かって徐々に径を増す脚部中位である。粘土紐を巻き上げて成形し、内外面の調整を終了後に、垂直方向に2箇所を切開し、直径を減じた上で、切開面同志を接合しており、いわゆる切開技法である。このため、横断面形は正円形でなく、歪んでいる。外面調整はナナメハケの後にタテハケ（9本/2.0cm）を重ねる。内面調整はナナメハケ（8本/1.9cm）で、所々にユビオサエ痕を残す。また、切開面同志の接合部には片手全部の指を当てて長いユビナデを加えている。胎土は細砂を少量含み、石英、酸化鉄粒、チャート、凝灰岩粒が観察される。焼成は普通、色調は外面が淡赤褐色、内面が橙褐色、器肉は灰黒色を呈する。

○四足獣埴輪脚部2

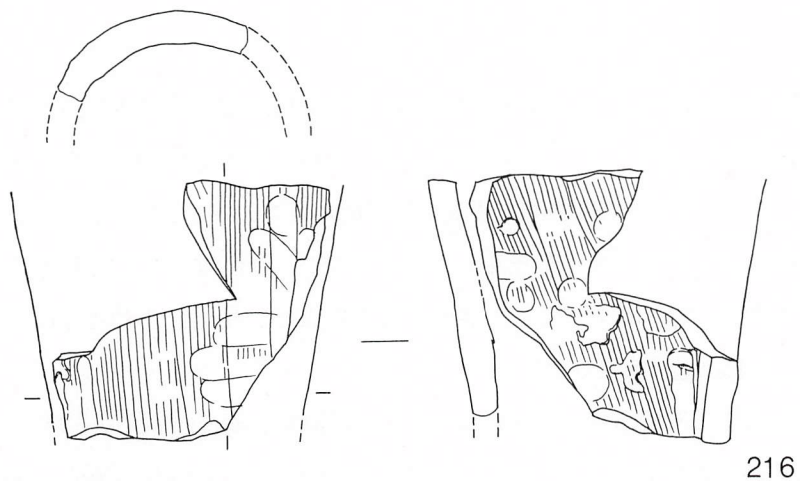
208は四足獣の脚部で、池の注記がある。残存率25%の破片から反転復原実測を行った。上端は少し外反しているので体部に取り付くと推定できる。上端での復原直径は12.3cm、器肉の厚さは1.0cmで、薄手の製作である。成形は粘土紐を巻き上げて、現存部に切開部はない。外面調整はナナメハケの後にタテハケ（8本/1.6cm）を重ねる。内面調整はナナメハケ（7本/1.3cm）で、所々にユビオサエ痕を残す。また、上部では体部との接合時に斜位のユビナデを加えている。胎土は粗砂を少量含み、チャート、凝灰岩粒、長石が観察される。焼成は良好だが、少し粉っぽい。色調は橙褐色を呈する。

9 器種不明の形象埴輪

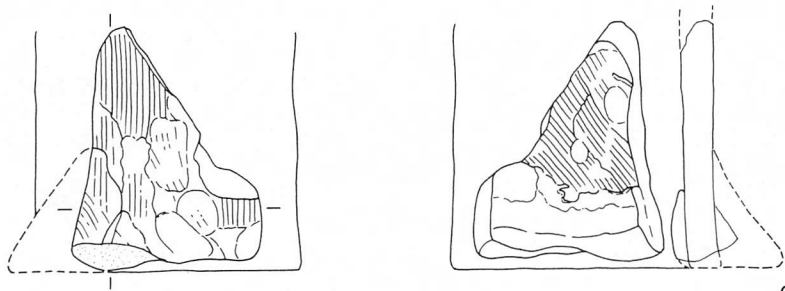
218は高い凸帯の巡る円筒で、上端に外方へ張り出す部品を固定した穴があり、その下側に補強用粘土が付く。人物埴輪の腕の接合部に類するが、凸帯の位置が腰帯の表現とするには高い位置にあり、腋の下の小円孔も伴わないので、人物埴輪の可能性は考えにくい。鳥形埴輪の台部（凸帯下段）から体部（凸帯上段）で、突出部に中実の頸部が挿入されていたとみるのが最も妥当性が高いであろう。現存部には足の表現はない。成形は粘土紐巻き上げ、外面調整はタテハケ（9本/1.9cm）で、補強用粘土の貼り付け部分にはユビナデを加える。内面調整は丁寧な縦位ユビナデである。胎土は細砂をやや多く含み、角閃石（特に多い）、酸化鉄粒、チャート、凝灰岩粒、長石が観察される。焼成は良好で、色調は乳褐色を呈する。



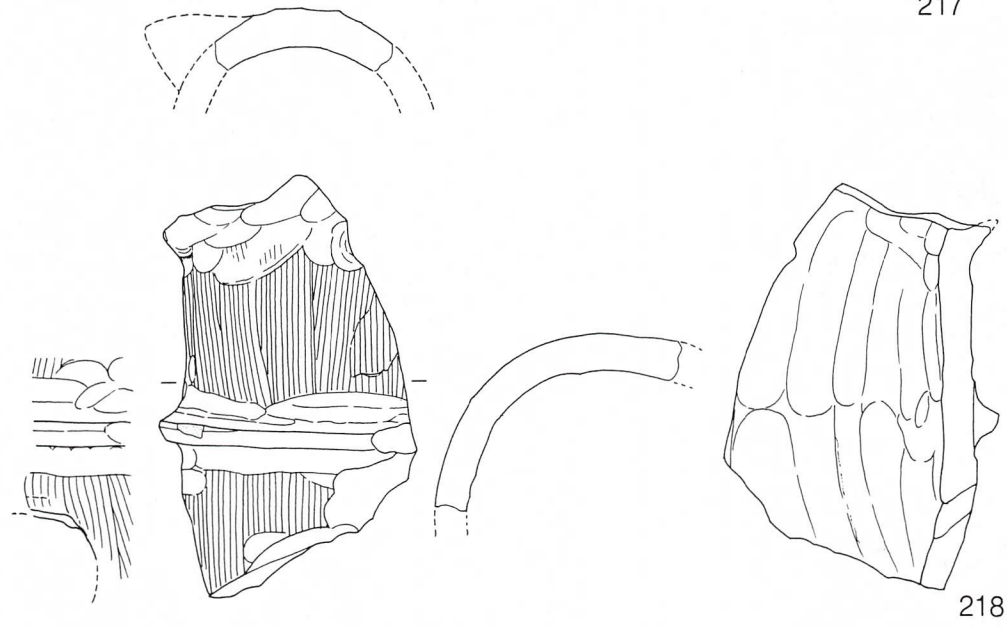
第15図 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図12



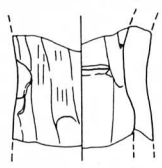
216



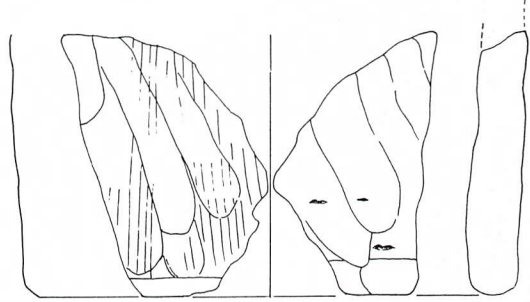
217



218



219



220

0 10cm

第16图 稻荷山古墳出土形象埴輪実測図13

おわりに

3回（3年間）の連載でようやく稲荷山古墳出土形象埴輪の資料報告を完了することができた。昭和43年の第1次調査から48年の第3調査までに出土した膨大な形象埴輪のうち、一定の特徴を有するものについては、いちおうすべて実測図と解説文を掲載することができた訳で、それなりの感慨がある。考古学に関心のある多くの方々に、補遺編とも言うべきこの資料報告を『埼玉稲荷山古墳』報告書と併せてご利用いただき、東国における最も著名で重要な古墳、稲荷山古墳とその埴輪をより深く知っていただければ、これに過ぎる喜びはない。

とくに、稲荷山古墳の形象埴輪は東国における人物埴輪発生期を代表するものであり、組成、数量、表現内容ともに極めて豊かなものがあり、小型塑像や顔面の付いた甲冑形埴輪、壺を捧げ持つ女子像などを含んでいる。また、後円墳頂部にも人物埴輪と共に多数の家形埴輪が据えられていて、今城塚古墳から出土して話題となっている円柱表現のある入母屋造り高床式建物の存在も明らかになった。

これらの新資料と知見は東国の大首長（＝王）一世一代の葬送儀礼実態や畿内大王権との関わりなどを理解する上で限らない価値を持っている。しかし、稲荷山古墳研究は途上にあって、未知の資料や知見が埋もれていることも事実である。今後の稲荷山古墳の史跡整備と問題意識を持った発掘調査が進展して、さらに新しい成果が加わることを期待するとともに、自分にとっては、稲荷山古墳の埴輪を総括するという大きな課題の残っていることを再確認してしめくりとしたい。